

## 大正後期の文化と国語科教育

——中等学校国語教育史 六—— 浜本 純逸

- 一 大正デモクラシーと教育
  - 二 自由・解放と管理主義  
石川啄木「雲は天才である」
  - 三 臨時教育会議と中等教育学校
  - 四 高等小学校の変遷——高等小学校は中等教育学校である
  - 五 新設された中等教育学校
  - 六 入学試験問題
  - 七 教育課程と国語科の構造
  - 八 大正後期に使用された国語教科書  
読本と文法教科書
  - 九 国語科学習指導の実際  
方言矯正 大村はま 林美美子
  - 十 国語科における新教育運動  
ダルトンプランの指導案
  - 十一 大正後期の表現学習——太宰治の「思ひ出」・  
、泉南高等女学校・自由学園の調べ学習
  - 十二 私立女学校の創設——羽仁もと子・与謝野晶子
  - 十三 講演会と弁論大会 澤柳政太郎の講演
  - 十四 芥川龍之介の「近代日本文芸読本」
- 一 大正デモクラシーと教育

第一次世界大戦（一九一四（大正三）年）年七月〜一九一八（大正七）年十一月を通じて資本主義経済が発展し、その後の相対的安定の中で民主主義の風潮が高まり、いわゆる大正デモクラシーの時代に入った。個人主義、自由主義、民主主義、人間愛を標榜する西洋の近代思想

が人々の心の中に浸透していき、女性と労働者の権利意識が高まっていった。

一九一（明治四四）年、平塚らいてうの『青鞜』発刊のことは、よく知られた「女性の人間宣言」であった。

今、女性は月である。他に依って生き、他の光によって輝く、病人のような蒼白い顔の月である。…… 中略……

私は日本に唯一つの私立女子大学があるばかり、男子の大学は女性の前に門戸を開くの寛大を示さない現状を悲しむ。

もはや女性は月ではない。

その日、女性はやはり元始の太陽である。真正の人である。

女性の人間宣言を書いている。

一九一四（大正三）年、夏目漱石は、学習院補仁会で講演した。そのテーマは「私の個人主義」であった。まさに日本における近代思想確立の最先端の課題に立ち向かったのである。さすがの漱石にとっても手強いテーマであったらしく前置きの多い、例えば『坊ちゃん』の中の人物を「一々実在のもの」と認めるならば「赤シャツはすなわち私のことである」などと余計な横道にそれたりしている。漱石の若き日の煩悶の結論は「自己本位」の認識であった。

私はこの自己本位という言葉を自分の手に握ってから大変強くなりました。彼ら何者ぞやと気概が出ました。いままで茫 然と自ら失っていた私に、ここに立って、この道からこう行かなければならないと指図をしてくれたものはじつにこの自我本位の四字なのであります。

この自己本位という「個人主義」の問題は、直ちに「国家主義」という「全体主義思想」に打ち当たる。それについては、漱石は平時と「国家存亡の時」とは次元の違う問題であると考え、「事実私一方中間階層の人々は高い教養・文化を求めようになり、私どもは国家主義でもあり、世界主義でもあり、同時に又個人主義でもあるのであります。」と語っている。そして誤解されないように配慮してか寒暖計の比喩を使

つて次のように言い足している。

各人の享有するその自由というものは国家の安危に従つて、寒暖計のように上ったり下ったりするのです。これは理論というよりもむしろ事実から出る理論といった方が好いかも知れませんが、つまり自然の状態がそうなるのです。国家が危くなれば個人の自由が狭められ、国家が泰平の時には個人の自由が膨脹して来る、それが当然の話です。いやしくも人格のある以上、それを踏み違えて、国家の亡びるか亡びないかという場合に疋違ひをしてただむやみに個性の発展ばかりめがけている人はいはずです。(夏目漱石講演・石原千秋解説『社会と自分』二〇一四年一月 ちくま学芸文庫 三六六頁)

これが漱石の確立した近代的「個人主義」思想であつた。

しかし、個人主義思想は大正期の権力者や資本家たちに受け入れられるものではなかつた。第一次世界大戦が軍人だけの戦いではなく政界・財界・軍人・国民を巻き込んだ総力戦であることを認識した政治家や軍人は、日本を戦争の出来る全体主義の国に導くべきだと考えるようになっていた。

中間階層の人々は高い教養・文化を求め、産業界は実務教育・技術教育の実施を強く求めた。両者の思いが中等教育学校の増設を促した。政府は社会の質的变化に対応するために、一九一七(大正六)年九月、臨時教育会議を開設し、日本独自の教育を方向づけた。

エレン・ケイの『児童の世紀』が原田実によつて一九一六(大正五)年に翻訳され、多くの教師が西洋の近代教育思想に出会つた。

大正デモクラシーの潮流の中で、子どもの個性を尊重し自治能力を育てる、新教育運動が展開された。中等学校においても画一的注入教育を打破し自律的な学習力を育てる、自由教育が試みられた。

一九一八(大正七)年四月、鈴木三重吉は児童雑誌『赤い鳥』を創刊した。三重吉の意図は、「世間の小さな人たちのため」の読み物と童謡を提供し、作文発表の場とすることであつた。こどもは芸術的に優れた

読み物を読む人、ありのままを表現する人であることを社会に認識させた。いわゆる「子どもの発見」を社会に促した。

民衆は 権利意識に目覚め護憲運動を起し、普通選挙権を求める運動を展開した。その結果として一九二五(大正十四)年三月、普通選挙法は成立したが、それは自由な社会活動を抑圧する治安維持法をともなつていた。

国際的には自由・解放の思想と他国を侵略して膨脹しようとする帝国主義的思想が対立し、国内的には個人主義思想と国家主義思想が対向していった。

一九二四(大正一三)年、講談社から大衆百万雑誌『キング』が創刊された。一九二六(大正一五・昭和元)年、改造社が『現代日本文学全集 六三巻』を配本開始。一冊一円だったので「円本」と呼ばれ、ブームを起こした。一九二七(昭和二年)、岩波文庫の刊行始まる。大量の書物の流通と読者の急速な拡大は読書国民を生み、国民を共通の幻想で結合させる機能を持つた。

## 二 自由・解放と管理主義

一九一六(大正五)の春、宇都宮中学校に入学した手塚富雄(ドイツ文学者・一九〇三〜一九八三)は、回想記『一青年の思想の歩み』において、その頃の青年が踏み入つていたのは、人文的・内省的な教養主義的潮流であり、「現実への関心は、なんとなく軽く低いものを感じられていた」と実感を述べる。その上で、手塚は、一九一七年のロシア革命・どさくさ紛れのシベリヤ出兵・第一次世界大戦の英米仏側の勝利などに触れて、「日本も新しい世界的国家へ」という希望を語っている。大戦の戦場とならず戦略物資などの生産で重工業を発展させた日本では中産階級が増え、経済的な豊かさや文化的な明るさがあったのである。

手塚富雄は、そのような状況の中で発せられた、原敬内閣の中橋徳五郎文部大臣(一九一七・九〜二二・六 在任)の新聞発言に心を動かされる。それは、「もはや学校は、学生生徒にたいして、うるさい規則づく

めや形式万能主義でのぞんではいけない。つねに制服や靴で登校することとに一定しなければならぬことはない。」という趣旨の談話であった。厳格な画一主義に不自由を感じていた中学生達は、組主任の川口先生に確かめる。

「もう学校へ下駄をはいてきても、かまわないんでしよう。」私たちは言った。

「だがそんなことを言った？」と先生は反問した。

「デモクラシーの時代です。文部大臣がそうしていいと言ったと、新聞に出ています。」

「文部大臣がなんだ。規則は規則だ。上つ調子なことを考えてはいけない。」

老練な川口先生の言葉には、いつもに似ずやや忿懣の調子があった。(注1 『手塚富雄著作集 第八巻』一九八一年七月 中央公論社 一二頁)

文部大臣は、これからの世界に雄飛して生きるであろう中学生に独立自尊の気概養成を期待していたのかもしれない。大臣の開放的な姿勢と教師ノ規則づくめの態度との懸隔の大きさに注目しておきたい。ともかく、文部大臣が中学校に自由を求めているところに大正デモクラシーの現実を見ることができよう。

### 三 臨時教育会議と中等教育学校

第一次世界大戦(一九一四〜一九一八)は、日本に戦争景気をもたらした。工業を躍進させたが、戦後はその反動で不景気をもたらした。都市では中産階層が生まれ労働運動が組織されつつあった。農村から都市への人口移動が進行し、立身出世をめざす青年の「受験」が社会のシステムに組み込まれていった。このような社会の変質・矛盾に対応するために政府は臨時教育会議(一九一七年五月)を設置した。

臨時教育会議設置の目的は、寺内正毅首相の開催挨拶によれば、天皇制国家体制を強化するための教育立て直し方策をえることであつ

た。次のように絶対主義国家建設に際しての教育の任務を明確に認識していた。

欧州ノ大戦勃発以来、交戦列国ハ兵馬倥傯ノ間ニ処シ尚且教育上ノ施設ヲ怠ラズ攷々トシテ学制ノ革新ヲ図リ以テ自彊ノ策ヲ講シツツアリ我帝国ハ現在ニ於テ兵火ノ惨毒ヲ被ルコト与国ノ如ク甚大ナラスト雖も戦後ノ経営ニ関シテハ前途益々多難ナラムトス此ノ時ニ際シテハ一層教育ヲ盛ニシテ国体ノ精華ヲ宣揚シ堅実ノ志操ヲ涵養シテ自彊ノ方策ヲ確立シ以テ皇猷ヲ翼賛シ奉ラサルヘカラス

(教育史編纂会編『明治以降教育制度発達史 第五巻』一九二二頁)

臨時教育会議は、一九一七(大正六)年一〇月から一九一九(大正八)年二月に至る約一年半の間に、九つの諮問事項について答申した。

1. 小学校教育ニ関スル件
2. 高等普通教育ニ関スル件
3. 大学教育及専門教育ニ関スル件
4. 師範教育ノ改善ニ関スル件
5. 視学制度ニ関スル件
6. 女子教育ニ関スル件
7. 実業教育ニ関スル件
8. 実業教育ニ関スル件
9. 学位制度ニ関スル件

これらの諮問について検討していた期間中に、ロシア革命(一九一七年)が起り、一九一八(大正七)年七月富山市の女性たちが米の安売り運動(いわゆる米騒動)を起した。内外ともにきわめて激しい動乱の中で会議をおこない答申を出した。

高等小学校については、教科目の取捨選択の範囲を拡大することを認め、実業学校については、制度の安定を認めたくえで実業補習教育

への国庫補助増額を求めた。

女子教育に関する答申(大正七年一月)では、「教育勅語ノ聖旨ヲ十分ニ体得セシメ国体ノ觀念ヲ鞏固ニシ淑徳節操ヲ重ニスル精神ノ涵養」を求め、女子は自ら忠良な国民であると共に、忠良なる国民を育てる賢母であることを求めた。それまでの女学校教育が賢母の教育に傾き、国体觀念の教育に欠けたところがあつたとする。女子の自立・自由を求めた大正デモクラシーの精神は認めず、国家のための良妻賢母教育にすり替えていつたのである。

中学校については、高等普通教育ニ関スル第二回答申(大正七年五月)において「模範教科書の編纂」・「感化を与える教材を加えること」を述べている。

中学校の学科要目ヲ改定シテ教科書ノ編纂ニ工夫ヲ施スノ余地ヲ与フルト共ニ模範教科書ヲ編纂スルノ方途ヲ講シ且ツ感化ヲ与フルニ一層有力ナル材料ヲ加フルノ必要アリト認ム

この答申が、寺内首相の「此ノ時ニ際シテハ一層教育ヲ盛ニシテ国体ノ精華ヲ宣揚シ……以テ皇猷ヲ翼賛シ奉ラサルヘカラス」という開会挨拶と翌年出された「建議(学校教育の效果)」の「国体ノ本義ヲ明徴ニシテ之ヲ中外ニ顯彰スルコト」(大正八年一月)に通底する教育の国家主義化思想の文脈において答申されたことを考えあわせると、中学校の国語教科書に与える影響は甚大であつた。つまり「国体の本義を明徴にするように「感化を与える」教科書を作りなさい」と国民の内面形成に国家が介入することを強請したのである。教科書編集方針の大転換であり、以後中等学校教科書は国家主義・皇国主義教材を多く採用しなければならなかつた。国語科は国語と軍国主義イデオロギーを教える教科へと変貌していつた。

いま一つの建議「教練振作の建議」(大正六年二月)は、一九二五(大正十四)年四月「陸軍現役将校学校配属令」となつて具体化された。現役将校による軍事教練は、中等学校の生徒に「命令に

服従する気風」を植え付けていつた。

#### 四 高等小学校の変遷——高等小学校は中等教育学校である

第一次世界大戦を契機として、わが国の産業は飛躍的に発展した。中間層が増加し、高等小学校・中学校・高等女学校・実業学校への進学希望者は増大していつたが、学校の新設は十分には即応できなかった。政府は、まず産業界の要請に即応して実業学校の増設を進め、次いで高等小学校の付設・増設をおこなつた。高等小学校の付設・増設は、経済的な事情で中学校・高等女学校・実業学校に進学できない児童の学習要求に対応する制度でもあつた。ここでは、この間の実情を弘前市と鳥取県を例に見てみよう。

##### 1. 弘前市における高等小学校の新設

弘前市における男女の実業学校設立の過程と弘前市立高等小学校の歩みとは不即不離の關係にあつた。

一九一(明治四四)年に第一尋常高等小学校、第二尋常高等小学校を設置した。一九一四(大正三)年四月、第一尋常高等小学校高等科を白蔵土町に移転独立して男子のみの弘前高等小学校となつた。第二尋常高等小学校は女子のみ収容の第二高等小学校となつた。

一九一七(大正六)年四月、弘前高等小学校に商業科が加設され、第二弘前高等小学校に弘前女子実業補習学校が併設された。普通科目のほか家事裁縫等、家庭婦人として必要なことを教えた。

一九二二(大正十一)年四月、弘前高等小学校に弘前市立弘前商業補習学校が併設された。一九二五(大正十四)年四月、弘前市立商業専修学校に校名変更。定員二〇〇名。

〔弘前市教育史下巻〕一九七九年、弘前市教育委員会 二三八～二四一頁  
大正四年頃から小学校で中等学校受験のための予習が始まつた。

##### 2 鳥取県における高等小学校の新設

高等小学校は、社会人となるための実業教育学校の性格と中等学校への予備的な性格とを背負って普及していった。鳥取県最初の「鳥取(因幡)高等科小学校」は、明治十八年十月、旧藩校の演武場を借用して開かれた。男子生徒の学校として出発したが女子生徒の入学者が増えたため、明治三〇年四月、市立女子高等小学校を分離独立させた。

明治三十九年に美保農業補習学校が設立され、明治四三年に遷喬商工業補習学校が設立された。遷喬補習学校は夜間授業をおこない、週四時間配当の国語科では「商工業上必要なる普通文の読方綴方書方を教えた」。

『新修鳥取市史 第五卷 明治 教育篇・社会篇』平成二〇年 三月鳥取市 第二章第一節 一、参照

鳥取県の場合、小学校数の変遷は、尋常小学校、尋常高等小学校、高等小学校の三種に分けて比較してみると、次の通りである。

種別	尋常小学校	尋常高等小学校	高等小学校
大正一年	一四〇	一〇四	一二
三年	一二三	一一六	一〇
五年	一一七	一一二	八
七年	一〇四	一一九	六
九年	九六	一三六	五
十一年	九〇	一三九	五
十三年	六四	一五八	四
十五年	五二	一六五	三

『鳥取市教育百年史』一九七四年十一月 鳥取市教育委員会 三三九頁

大正期には、地域の数校がブロックとなつて一つの高等小学校を設立する方式が解消し、尋常小学校に高等科を付設するという形態が多くなつた。

全国的に高等小学校が普及して行つたけれども、それに加わることのできない児童も少なくなかつた。入学難のことがしばしば話題にされた

が、「それは中産階級の子弟のせいいたくなく悩みにすぎない」という声もあった。昼間におこなわれる小学校授業を受けることができない小学生は、夜間授業を受けていた。

### 3 高等小学校の変化と分化

一九〇七(明治四〇)年「小学校令改正」によって義務教育が六年に延長され、高等小学校は教科学習と実業教育を併せておこなう学校となった。当初は経済的な事情によって上級学校にしんがくできない児童の学習要求に対応する学校として始められたが、次第に教科学習を主とする学校と商業・裁縫などをおしえる学校に分化していった。前者は受験準備をするという性格を濃くしていったのである。後者は農業補習学校の併置などによって地域の教育要求に応えながら存続し、中には中学校・女学校・実業学校に発展したものもある。

大正九年に改訂された「実業補習学校規定」の第一条には、その目標を次のように規定していた。

職業ニ従事スル者ニ対シテ職業ニ関スル知識技能ヲ授クルト共  
二 国民生活ニ須要ナル教育ヲナス

実業補習学校および高等小学校は、「知識技能ヲ授クル」と共に「国民生活ニ須要ナル教育」をなすという両面を併せ持つ中等教育機関として位置づけられ、公民教育の機関に組み込まれていったのである。

### 五 新設された中等教育学校

一八九七(明治三〇)年八月 都城町立実業補習学校設立↓一九〇

四(明治三七)年四月都城商業学校開校↓一九四八年県立  
都城商業高等学校

一九四一年四月宮崎県立都城高等女学校↓一九四八年県立都城商業高  
等学校

一八九九(明治三二)年十一月 広島商業学校設立↓広島県立広島商業

学校

- 一八九九(明治三二)年 富山県第三中学校開校↓一九〇二年魚津中学校↓一九四九年魚津高等学校
- 一九〇〇(明治三三)年 岐阜県土岐郡立陶器学校設立↓一九二二(大正九)年 多治見工業学校と改称。一九二二(大正十一)年三月 県立移管。
- 一九〇一(明治三四)年 愛媛県私立北予中学校設立↓一九三八年愛媛県立北予中学校↓一九四九年県立松山北高等学校
- 一九〇二(明治三五)年四月 私立三輪田女学校開校↓一九四八年三輪田学園高等学校
- 一九〇三(明治三六)年五月 庁立上川中学校開校↓一九一五年庁立旭川中学校↓一九五〇年旭川東高等学校
- 一九〇三(明治三六)年四月 熊本県立高等学校開校↓県立第一高等女学校↓一九四九年県立第一高等学校
- 一九〇四(明治三七)年四月
- 一九〇八(明治四一)年三月組合立武雄高等学校↓一九一五年武雄実科高等女学校↓武雄高等学校↓一九四八年武雄高等学校
- 一九〇八(明治四一)年五月 私立西宮女子技芸学校設立↓町立西宮実科女学校↓一九四八年西宮市立西宮高等学校
- 一九一四(大正三)年 鳥取県立商業学校 五年制となる
- 一九〇九(明治四二)年 尾道市立高等女学校開校↓広島県立尾道東高等学校
- 一九一〇(明治四三)年 鳥取県立商業学校開校↓一九五七年鳥取県立商業高等学校
- 一九一三(大正二)年三月高井戸実業補習学校開校↓中野工業高等学校
- 一九一五(大正四)年十二月 井荻村立女子実業補習学校↓荻窪高校
- 一九一七(大正六)年四月 私立成城中学校創立、沢柳政太郎校長
- 一九一八(大正七)年五月 東京市立第四工業補習夜学校↓小石川工業高等学校
- 一九一九(大正八)年四月 荏原郡目黒村立目黒実科女学校↓目黒高等学校
- 一九二〇(大正九)年四月 沖繩県組合立女子実業補習学校創立↓一九二四年国頭高等女学校↓一九四九年名護高等学校
- 一九二二(大正十)年 自由学園(羽仁もと子)高等女学校令によらない学校として創立↓一九三五(昭和一〇)年男子部開設
- 一九二二(大正十)年 文化学院(西村伊作)創立↓一九二五(大正一四)年 文化部(男女共学)設置
- 一九二二(大正十)年 魚津高等学校開校↓一九四九年魚津高等学校
- 一九二九(昭和四)年 魚津町立実業補習学校開校↓一九四九年魚津高等学校
- 一九三二(大正十一)年 県立松山城北高等学校↓一九四九年県立松山北高等学校
- 一九三二(大正十一)年四月 庁立俱知安中学校開校↓一九四九年道立俱知安高等学校
- 一九二七(昭和二)年四月町立俱知安実科高等女学校開校↓一九四九道立俱知安高等学校
- 一九三二(大正十二)年四月成城第二中学校(校長澤柳政太郎)開校
- 一九三三(大正十二)年四月 愛知県国府高等女学校↓一五〇(昭和二五)年 豊川市立高等学校
- 一九三三(大正十二)年四月 茨城県下館商業学校開校↓茨城県立下館中学校↓茨城県立下館第一高等学校
- 一九三三(大正十二)年四月 長野県松本第二中学校開校 ↓長野県松本県ヶ丘高等学校
- 一九三三(大正十二)年四月 東京府立第六高等女学校開校↓一九五〇年 東京都立三田高等学校
- 一九二六(大正一五)年 第一工業学校開校↓岐阜工業高等学校
- 一九二六(大正一五)年 第二工業学校開校↓大垣工業高等学校

六 入学試験問題

1 大正五年度奈良県立畝傍中学校

受験者三九四名の答案について、次のように観点を設けて詳細に分析しており、受験生(小学校六年生)の実態と教師の学力観がよく分かる。  
一九一六(大正五)年度奈良県立畝傍中学校の入試問題は、五問である。1 漢字語句の読み、2 話方、3 書取、4 綴方(普通文)題「畝傍山」、5 綴方(書簡文)題「教科書を注文する文」。ここでは、4と5の分析を紹介する。

綴方 (普通文) 受験人員三九四名

題 「畝傍山」

第一 成績歩合

- 甲(構想モ字句モ共ニ優秀ナル者) 七四 一九%  
乙(右ノ普通ナル者) 二八二 七二%  
丙(右ノ孰レカ或ハ双方共ニ劣ル者) 三八 九・七%

第二 誤り多キ諸点

- 一、文章全体ニ就キテ  
1 文体ハ文語体、口語体、何レニテモ随意トナセシガ一文ニ文語ト口語トヲ混用セルモノ往々アリタリ  
2 仮名ハ片仮名ヲ用フベク注意セシニ拘ハラズ全部若クハ一部平仮名ヲ用ヒシモノ亦往々アリ  
3 文題ヲ全ク誤認セルモノ亦少カラズ即チ題ヲ春ノ野或ハ春ノ山ト書シテソノ文ヲ書ケルモノアリタリ、又畝傍山ノ事ヲ記述セズシテ畝傍御陵若クハ橿原神宮ノ事ノミヲ記セルモノ、耳成山ヲ誤記セルモノ往々アリタリ、  
二、思想ニ就キテ  
1 思想ノ纏ラズ前後支離減裂ナルモノアリ、或ハ叙述簡單ニ過ギ甚ダシキハ、畝傍山ハ此ノ八木町ノ東北二位ストノミアルノ如キスラアリ

2

文中往々事実ニ適セヌ語句ヲ用ヒシモノアリ仮令ヘバ  
神武天皇ヲマウテ(祈リノ意)奉ルノ如キ、

三 語句ニ就キテ 誤字・脱字・仮名遣ナド

綴方(書簡文)題「教科書を注文する文」

一 成績歩合

- 甲(構想モ字句モ共ニ優秀ナル者) 五七 一四%  
乙(右ノ普通ナル者) 一七二 七二%  
丙(右ノ孰レカ或ハ双方共ニ劣ル者) 九四 二四%  
劣等 七一 一八%

備考

一、題意ニ適合セザルモノ

- 1 註文ノ意味ヲ間違ヒテ借用トセルモノ  
2 買求メヲ人ニ依頼スル文トナセルモノ  
3 神武天皇御陵参拝ニ友ヲ誘フモノ  
4 畝傍山ノ題ニテ書簡文ヲ書ケルモノ  
5 父ノ法事二人ヲ招ケルモノ等誤謬有リ  
二、時候ノ挨拶等ノ為メ全部ヲ費シ、本文ニ只「教科書ヲ註文致シ候」トナセルモノ多シ  
三、片仮名ト平仮名トヲ混合セシモノ多シ  
四、候間、候処、候ヘバ、ノ用法誤ルモノ多シ  
五、敬語ノ用法ヲ誤リ例ヘバ  
御承リ候、御求メ 度候、御買ヒ可申候  
六、之無、是有、在罷、賀奉候、下被度等ノ誤り亦多シ  
七、漢字ノ誤用  
手紙ノ就キ次第、致急、壮建、住文、御降生、御在候、勤言、言面同、御約介、其擦等ノ如シ

国語全体ニ就キテノ概評

読方、話方、(書取ニ就テハ、国語読本中ヨリトリシ問題ハ可成ニ出来タルモノアレドモ)割合ニ出来バエ悪シキ感アリ綴方ニ就キテハ普通文ト書簡文トノ区別スルヲ解セズシテ普通文ノ題ニ平仮名交リニ候文体トシテ強ヒテ書簡文体ニ擬作シテ提出セルモノ又ハソノ反対ニ書簡文題ヲ普通文ニ作為シテ出セルモノナレド両三人アリタリ尚普通文ニ

春ノ野 春ノ山

ナドノ試験問題以外ノ題ニテ作文セルモノナドハ入学試験準備ノ際予習シ置キシモノヲ無意識ニテソノ俣書キシモノナラン、是等ハ何レモ尋常六年終了者ニハ作文力概シテ不足ナル感アリ

(『畝傍中学校七十年史』八三・八四頁)

## 2 大正十二年 熊本県立第一高等女学校

### 第二日 国語問題甲

次の文を讀んで後の問に答へよ。

三朝ばかり霜がつづきました、今朝も前の板橋を白くして、井戸からも白い(一)湯気(一)のあがるのを見えます、山も林も小川の水もこれからは(二)まだ瘦せるのみでございませぬ、

(一)背戸(一)の桐の葉は落ちつくして、楓の葉が昨日

今日(三)雨とみだれて居ます、(四)腕程あつた里芋の茎も

ぐっつたりと垂れ、

畑のへりに植ゑられた豆菊ばかりが、

(九)今を盛りと榮えて居ます、朝日がパツとさして(一)田圃(一)の霜をてらしますと、あたりは(二)薄靄(一)

につつまれて、朝飯(一)炊く(一)煙が低く地をはつて

見えます。学校ではそろそろ(九)例の(五)南の窓下がにぎ

はひませう。今夜にも(二)木枯(一)が大地をゆすつて

(六)冬の領にしてしまふかも知れませぬ。

(問)

(一)文中波線の字の読方を( )の中に書け。若し知らずばどんな意味にとればよいかを書け。(10点)

(二)山や林が瘦せるとはどんな事をいふのか。(5点)

(三)雨とみだれる何がどんなにして居ることか。(5点)

(四)腕程あつたどんな意か、そしてここでは何をさして居るか。(5点)

(五)何故に南の窓下がにぎはふのか。(5点)

(六)冬の領にするとはどんな事か。(5点)

(七)作者の見て居る景色を略図であらはせ。(略図にして井戸、豆菊その他すべての物の位置を文字で示してもよろしい。)(20点)

(八)自分の尤も感じた所を詩か歌か俳句のやうなものに作りかへて見よ。(15点)

(九)次の二語、本文中に使つてあるやうな用い方で短文各一つづつを作れ。(10点)

1、今を盛り

2、例の

作文科 題「××の問題」

(説明)一昨日から昨日にかけての試験問題について思出すこと何でも書いてほしいのです。××の所には「読方」とか

「地理」とか自分の書きたい学科を入れなさい。そして幾題でも書けるだけ書きなさい。一科だけに限りません。(熊本

県立第一高等学校『第一高校百年史』七四四頁)

3 大正 十一年 県立呉中学校入学試験 国語問題



## 第一問

我が国の農業中其の進歩最も後れたるは畜産の業なり足我が国の氣候風上の畜産に埒すぎるにあらざり日常の食物は七として穀物野菜魚類等に仰ぎ又衣類の原料は之を綿麻生糸に求むる等国民の生活上乳肉卵毛皮の如き家畜の生産物を利用すること少かりしによる

右の文を読みで次の問に答えよ

- イ、我が国の畜産業が進歩しなかつたわけをいへ  
ロ、家畜の生産物を利用する」とは何を何に用ふるといふのか  
ハ、「主として」は何故にここに必要なのか  
ニ、「風土」の意味をいへ  
ホ、「仰ぎ」はここではどういふ意味か

## 第二問題

(イ) 次の文を解釈せよ

- 一、成敗に至りては臣のよく知る所にあらざり  
二、事志と違へども能く処すべき道に処してあやまらざりしは彼の面目をうかがふに足る  
三、智徳兼備の人なりとも事の成否は憶測すべからず  
(ロ) 次ノ文ハツマリドウイフコトカ分り易ク説明セヨ  
一、義務を離れて権利はない  
二、朕は汝等の忠烈に依り祖先の神靈に対ふるを得るを喜ぶ

## 第三問 (書取)

省略

## 第四問題

- (イ) 次ノ文ニアヤマリアアラバ正セ  
一、出師の表は人をして涙を流す  
二、効果空しくして宿志の果たさるるも近きにあらん  
三、若し到着すれば消息を示せり  
(ロ) 左ノ各文ニ就イテ「や」ノ意味ノチガヒヲ説明セヨ

一、所変れば様々に変わるよそほひおもしろや

二、汝はこの商標を知れりや

三、人や馬で谷がうづまつた

四、何ぞひとり彼を恐れんや

## 第五問題

左ノ語句ヲ適當ナル順序ニ列ベテ出来タル部ヲ書ケ(他ノ文句ヲを人レテハ(ナラヌ))

(イ) 気がつく いろいろ たえずにこにこして居る顔

であるのに 多くの人々の顔をみるに 中でも気持

ちよいのは 違つて居るのに

(ロ) つまり 己の属する国家の発展を 一個人なる

と共に 人間は 来さんことを 又国家社会の一

員なるを以て 力むべきなり

(『創立八十周年記念誌』三津田ヶ丘 広島県立呉三津田高等学校九〇〜九二頁)

畝傍中学校では、受験者の答案の分析をしている。学習者の学力実態の把握は、その後の学習指導の参考になつたであろうし、翌年の問題作成にも益するものがあつたであろう。試験に真摯に向きあつて居る。

「新教育」としてのダルトンプランを実践していた熊本県立第一高等女学校の国語問題は、意欲的で進歩的である。全体に「推量する力」・「創造する力」を量ろうとしている。

漢字の書き取り問題でも単なる暗記問題に終わることなく意味を想させている。文章の読解力を言葉で言い換えさせるだけでなく略図でも表現させている。創作力(詩・短歌・俳句)も学力と認めている。

作文問題では、受験の体験の思い出を書かせている。感想・説明・批評する表現力・思考力を量ろうとしているのであろうか。

## 七 教育課程と国語科の構造

### 1 高等小学校の教育課程と週間教授時数

科目/学	一年	二年
修身	二	二
国語	六	六
算術	四	四
国史	二	二
地理	二	二
理科	二	二
図画	一	一
手工	一	一
唱歌	一	一
体操	三	三
実業	男五女二	男五女一
家事	四	四
裁縫		
計男女	二九 三〇	二九 三〇

上表は、大正一五年四月、「高等小学校の科目別週間教授時数」である(文部省『学制百年史』一九七二年)。

教科教育と実業教育の時数は五対一であった。高等小学校では、教養・知識の学習が主であったと言えよう。

## 2 商業学校の教育課程

鳥取商業学校、五年制商業学校となった。

鳥取商業学校予科教科授業時数

科目	読書	習字	作文	数学	歴史	英語	体育	計
一学年	国語	楷書	普通	珠算	日本	読方		30
二学年	漢文	行書	文	算術	外国	書取		30
週時					同	文法	体育	30
数計	6	2	2	12	4	16	6	60

\*字数の関係で本表で省略した科目は、修身2時間、地理4、理科4、図画2である。英語の時間が多いこと以外は中等学校の一・二学年の科目と殆ど変わらない。商業学校に必須の簿記・商品・商業実践等は「本科」で学習することになっていた。

『鳥取市教育史』一九七四年 三四〇・三四一頁

3 高等女学校の教育課程  
 宮城県第一女子高等学校の『一女高百年史（一九九七年）』によれば、  
 大正一二年度の宮城県第一女子高等学校と一般的な中学校の「在学中授

項目 教科目	一女高4年間		一般中学校5年間	
	授業時数	全時数との比%	授業時数	全時数との比
修身	222	5.0%	208	3.1%
国語	講読	18.3	728	22.4
	作文		188	
	文法		37	
	漢文		0	
	習字		148	
英語	370	8.3	1,506	22.4
地理 歴史 数学 理科 体操 図画 音楽 (各時数省略)				
家事	148	24.2	0	0
割烹	74			
裁縫	777			
手芸	74			
教育	74	7.4	1.7	0
計	4,440	100	6,729	100
一学年あたり時数	1,110		1,346	
備考	年間約37週	週30時間	年間39週	週34時間

業総時数が並べて記されている。

3 中学校の教育課程

3-1 大正五年度の文部省施行規則・静岡県学則・沼津  
 中学

校学則の第五学年の毎週教授時間数は、次表の通りであった。

	施行規則	県学則	沼津中学校
修身	1	1	1
国語及漢文	6	6	5
外国語	7	7	7
数学	4	4	5
物理及化学	4	4	5
歴史地理 博物 物理及化学 法制及経済 図画 唱歌 (省略)			
実業	(2)		
体操	3	4	3
計	31(33)	32	32

沼津中学校では、国語と体操を減じて数学と物理及化学を増加  
 時間に行っている。受験対策であった。

改めた。

3-2

大正八年三月、文部省は中学校の教育課程を小規模ながら

計	法制及び経済・図画・唱歌・体操（省略）	実業	物理及化学	博物	数学	歴史地理	外国語	国語及漢文	修身	学科目
										一年
二九				2	4	3	6	8	1	一年
三〇				2	4	3	7	8	1	二年
三〇			2	2	5	3	7	6	1	三年
三三		2	4			2	4	3	5	5
三〇		2	4		4	3	5	5	1	五年

一・二学年の国語授業が八時間に増加されていることに注目したい。

に「静岡県立中学校学則」を定めた。

3-3 大正八年「規則改正」後、静岡県では、大正九年三月

外国語(英語)	漢文及国語	修身	教科
綴方 発音	習字 作文	勅語 作法	一年
習字 書取 作文 話方 訳解 読方	同上	要領 作法	二年
文法 書取 作文 話方 訳解 読方	習字 文法 作文	同上	三年
同上	文法 作文	戊申詔書 道德要領 我国道德	四年
書取 作文 話方 訳解 読方	文法 作文	同上	五年

このような「学則」が各県から各中学校に通知され、各中学校はこれに準拠して自校のカリキュラムを作成した。

八 大正後期に使用された国語教科書

1 出版れた中等学校教科書

1-1 高等小学校の教科書

大正	教科書名	編著者名	発行所
一九二〇(九)年	「高等小学読本」二冊	文部省	文部省
一九二六(十五)年	「高等小学読本」二冊	文部省	文部省
一九二六(一五)年	「高等小学読本女子用」二冊	文部省	文部省

1-2 中学校教科書

大正	教科書名	編著者名	発行所
一九〇〇(明治三三)	「日本文法教科書」大槻文彦		宝文館
一九〇七(明治四〇)年	「中等文法教科書卷一」山田孝雄		宝文館

一九二二(一〇)年	「中等国語教科書」十冊	吉沢義則	修文館
	「国文新読本」十冊	藤村・島津	至文堂
	「中等新国文」十冊	三矢重松	文学社
	「新制中等国語読本」十冊	開成館編輯所	開成館
一九二三(一一)年	「中等国文」十冊	広島高師国漢研	六盟館
	「現代国語読本」十冊	八波則吉	開成館
一九二四(一二)年	「国文新選」十冊	垣内・野村	明治書院
	「国語正読本」五冊	東京高師国漢研	目黒書店
	「新時代国語読本」十冊	開成館編輯所	開成館
	「帝国新読本」十冊	芳賀矢一	富山房
一九二五(一四)年	「現代国語読本」五冊	東京高師国漢研	目黒書店
	「新日本読本」十冊	吉沢義則	修文館
	「新修中等国語読本」	落合・金子	明治書院

「中等新国文」十冊 大島・黒羽 金港堂  
 「改訂中等新読本」 藤村 作 大日本図書

□ 1-2 高等女学校教科書

一九一九(八)年	「大正女子実科読本」八冊	保科孝一	育英書院
	「日本女学読本」八冊	帝国婦人協会	明治書院
一九二二(一〇)年	「女子新読本」十冊	久松潜一	至文堂
一九二二(一一)年	「新制女子国語読本」十冊	開成館編輯所	開成館
一九二三(一二)年	「女子新国文」八冊	芳賀矢一	富山房
	「女子国文読本」十冊	高野辰之	光風館
一九二四(二三)年	「新編女子国文」十冊	佐藤・大島	明治書院
	「現代女子国語読本」十冊	八波則吉	東京開成館
	「女子国文新編」十冊	垣内松三	文学社
一九二五(二四)年	「女子新読本」十冊	藤井・春日	修文館
	「女子国文読本」八冊	松井簡治	三省堂
	「女子国語読本」十冊	吉田弥平他	金港堂
	「国文女学校用」十五冊	岩城準太郎	目黒書店
	「女子国文新選」十冊	富山房編輯部	富山房
		吉沢義則	星野書店

1-3 漢文教科書

一九二三(一二)年	「中学漢文教科書」五冊	井上哲次郎	光風館
一九二〇(九)年	「中等漢文教科書」五冊	林 泰輔	三省堂
一九二二(一〇)年	「漢文新編」五冊	塩谷 温	弘道館
一九二六(一五)年	「漢文新選」五冊	安井小太郎	積文館

2 大正後期国語教科書の目次と教材例

2-1 大正九年版 「高等小学読本」

文部省

卷一

第一課	有栖川宮威仁親王	第十六課	水遊び
第二課	足柄山	第十七課	資本
第三課	真の知己	第十八課	登山
第四課	故郷	第十九課	言語
第五課	布哇通信	第二十課	熱帯地方の果樹
第六課	公園	第二十一課	象狩
第七課	頼山陽	第二十二課	伝染病
第八課	關原合戦	第二十三課	軍馬の忠義
第九課	武器の変遷	第二十四課	萬里の長城
第十課	日本海	第二十五課	共進会の模様を 報ずる手紙
第十一課	西比利亞鐵道	第二十六課	四季の月
第十二課	ペートル大帝	第二十七課	マルコ・ポーロ
第十三課	海の朝	第二十八課	害虫と益虫
第十四課	太田道灌	第二十九課	スパルタ武士
第十五課	都会と田舎	第二十課	母の愛

教材例 1

第十七課 資本

産業ヲ興スニハ資本無カルベカラズ。野生ノ果物ヲ採リ、海辺ニ魚介ヲ集ムルガ如キハ労働ノミニテ為シ得ル生産ナレドモ、若シ一步ヲ進メテ、網ヲ投ジテ魚ヲ漁シ、弓ヲ射テ鳥獸ヲ捕ヘンカ、網及ビ弓矢ハ即チ其ノ生産ニ必要ナル資本ナリ。故ニ農業者ニ取リテハ耕作用ノ農具・種子・肥料・家畜ノ如キハ皆必要ナル資ニシテ、工業者ニ取リテハ工場・機械及ビ其ノ機械ノ運転ニ要スル石炭等、皆其ノ資本ノ一部ナリ。サレバ資本トナルベキモノノ種

類ハ甚ダ多く、必ズシモ貨幣ノミニニ限レルニ非ズ。貨幣ノミヲ資本ト考フルハ誤ナリ。

資本ヲ分チテ固定資本・流動資本ノ二種トス。固定資本ハ幾回モ同ジ用途ニ充ツルコトヲ得ルモノヲイフ。例ヘバ農家ノ農具家畜、工業者ノ工場・機械ノ如キ是ナリ。流動資本ハ繰返シテ同一ノ目的ニ供スルヲ得ズ、一回ノ使用ニテ全ク消費セラル、モノヲイフ。農夫ノ田畑ニ蒔ク種子、牛馬ニ與フル飼料、工場ニテ使用スル石炭等ハ是ナリ。綿糸製造ニ要スル棉花ノ如キモ、一旦糸トナルトキハ棉花トシテ他ニ用フルコトヲ得ザルガ故ニ、流動資本トイフベキナリ。

固定資本ト流動資本トハ相待チテ其ノ効用ヲ現スモノニシテ、蒸氣機關ハ石炭ヲ得テ運転シ、紡績機械ハ棉花アリテ綿糸ヲ作ルヲ得ルナリ。故ニ固定資本ト流動資本トハ互ニ適當ナル比例ヲ保タシメザルベカラズ。然ラザレバ必ズ損失ヲ招ク。例ヘバコ、ニ一紡績工場アリ、數多ノ棉花ヲ買入ルトモ、工場ノ規模ニ伴ナハザルトキハ、折角買イイレタル棉花ヲ使用セズシテ寝セ置カザルベカラズ。又其ノ規模ノ大ナルニモ關ラズ、之ニ相当スル棉花ヲ買入レザルトキハ、機械ノ一部ヲ運転セズシテ遊バセ置カザルベカラズ。イヅレニシテモ其ノ損失ヲ免レザルナリ。

生産ノ資本タルベキモノモ其ノ使用ノ目的ニヨリテハ、資本ノ用ヲナサザルコトアリ、例ヘバ馬ハ耕作用・運搬用トシテハ資本タルベケレドモ、競馬ノ如キ娛樂ノ爲ニ使用スルトキハ生産ノ資本トナラズ。貨幣モ商品ヲ購入シテコソ資本トハナレ、物見遊山等ノ遊興ニ徒費シテハ生産ノ資本トナラザルガ如シ。

社會全般ヨリ見レバ生産ノ資本トハナラザレドモ、一私人ノ營利ノ目的ノ爲ニハ資本トナリ得ベキモノアリ。例ヘバ馬ヲ娛樂ノ爲ニ使用スルハ生産ノ目的ニハ合ハザレドモ之ヲ貸貸スル所有主ハ之ニヨリテ利益ヲ得ベキガ故ニ、營利ノ資本ト稱シ得ベシ。又彼ノ劇場ノ如キモ生産的資本ニ非ザルコト勿論ナレドモ、其ノ所

有者ノ為ニハ營利ノ資本ナルコト明カナリ。此ノ如ク私人ノ營利ノ目的ニ使用スル資本ヲ營利資本ト名ツク。營業ノ規模ノ大ナルニ随ヒ、資本モ亦大ナルベシ。故ニ大ナル事業ヲ營メント欲スル者ハ必ず大ナル資本ヲ投ゼザルベカラス。常ニ事業ヲ擴張セント欲スル者ハ絶エズ資本ノ増加ヲ圖ラザルベカラス。社会ノ生産ヲ目的トスル資本ニ於テモ、私人ノ營利ヲ目的トスル資本ニ於テ、其ノ理ハ一ナリ。

近代国家建設の爲の産業についての啓蒙的な文章である。中学校の「法制及び経済」に相当する文章であろう。資本主義社会をめざして、爲政者の立場から少年たちに「資本」について固定資本・流動資本・營利資本に分けて明快に述べている。

構成（組み立て）のしっかりした、論理的な文章である。まとめの文章には、必ず「例えば……」と例を示して分かりやすくしている。それにしても、高等小学校二年生（新制の中学二年生）にはレベルの高い文章である。国語科においても「資本とは何か」について考えさせようとしている。ここには近代国家建設への編集者のやや性急な姿勢が見受けられる。内容が濃い。

## 教材例 2

### 第十九課 言語第十九課 言語

言語は人の感情を動かすこと最も強く、一言の不明より不測の誤解を生ずることあり。一言の誤解より十年の交情を破ることあり。言を發するに先だちて、能く其の言を選ばざるべからず。野卑なる言語を用ふるものは他人の輕侮を招く。言語は温雅なるべし。特に婦人に於て然りとす。  
人においてしかりとす。

情内に激すれば、言外に荒し。賣言葉に買言葉、つものりつものりて争鬪の種となる。「眼を怒らし、口を尖らせて罵りさげぶは其の樣見

苦し。怒る時は黙するに如かず。熱心其の度に過ぎて、徒に声を張上ぐる時は聴者の耳に入り難し。言語を發するには、常に心の冷靜を保たざるべからず。人は義理に服し、声音に服せず。

「與に言ふべくして、之と與に言はざれば、人を失ひ、與に言ふべからずして、之と與に言へば、言を失ふ。」失言は威信を傷つくること甚だし。寡言を貴ぶは多辯を戒めんが爲なり。多辯必ずしも戒むべきに非ず。饒舌を惡むのみ。饒舌なる人の口は禍の門なり。

### 三

徒に他人の意を迎へて、感情を和げんが爲に言語の巧を弄するは其の心事の卑劣なるを知るべし。孔子曰く、「巧言令色、鮮し仁。」と。辯舌爽快なるも、心に誠實なければ、人を感じしむること能はず。言論拙劣なるも、誠意より發すれば、人を動かすに足る。至誠を以てして動かさるものは、未だこれあらざればなり。故に言は忠信を主とす。

孟子曰く。「人の言を易くするや、責なきのみ。」言の貴きは之を行ふにあり。行はざるの言は無責任の言なり。其の言軽く、其の人卑し。故に「君子は言に訥にして、行に敏ならんことを欲す。」大言壯語して自ら快しとするものは與に謀るに足らず。

博識をてらひ、所長を示さんが爲に發する言には耳を傾くるもの少し。此の人にして、此の際此の言なかるべからずと思はるゝ場合に發する言は、言々人をして傾聽せしむ。

相知らざる人多き處にては、務めて沈黙を守り、人の言のみ聴くべし。貝原益軒と同船して、得意に經義を談じ、後益軒の名を聞きて赤面したる青年を思へ。

人と語る時、己独り喋々するは禮に非ず。人をして多く言はし

むべし。其の所長を聞くは我に於て益あり。人の言を横取し、又は人の言未だ終らざるに、我が言を差しはさむが如きは非礼の最も甚だしきものなり。能く人の言を聴終りて然る後おもむろに応答すべし。

我が前に我を称揚する言には、耳を傾くることなかれ。我が前に我を抑制する言をば迎へ聴くべし。「良薬は口に苦けれども、病に利あり。忠言は耳に逆へども、行に利あり。」

2—2 大正十五年版 「高等小学読本」卷一（一学年用） 文部省  
卷一 目次

第一課 昭憲皇太后御歌	第十六課 征衣服上途
第二課 太田道灌	第十七課 頼山陽
第三課 ポチ	第十八課 象狩
第四課 蒔かぬ種は生えぬ	第十九課 南洋の珍果
第五復 盤珪禪師	第二十課 綱引
第六課 野火止の用水	第二十一課 広瀬武夫の手紙
第七課 洞庭湖	第二十二課 漁船帰る
第八課 契約	第二十三課 かぶと虫
第九課 山村	第二十四課 スバルタ武士
第十課 人を周旋する手紙	第二十五課 統計
第十一課 笑話	第二十六課 筏流し
第十二課 フェルチナンド・マゼラン	第二十七課 滝沢馬琴の苦心
第十三課 真の知己	第二十八課 やまあらし
第十四課 西洋史の製造	第二十九課 足柄山
第十五課 海の朝	第三十課 故郷

教材例 3

卷一 第十一課 笑話

壺

そさう者壺を買ひに行き、うつむけてあるを見て、「こんな口の無い壺があるものか。」と言ひながら、ひつくりかへし、「底も抜けてゐる。」

数珠

向ふより来る者数珠をくびに掛け、大きな笠を着たり。うつけ者之を見つけ、手を打つて感じ、「そなたが着たる笠は、殊の外大きい。何として其の数珠をくびに掛けられた。」と問ふ。「いや、これは先づ数珠を掛けてから笠を着たのぢや。」と言つたれば、「とかく物は聞いてみぬと。」

走り自慢

走ることを自慢にする者あり。或時盗人を追ひかけ行く。向ふより友達来り、「なんだなんだ。」「盗人を追つかけてゐる。」「何處にある。」「あ、追越してしまつた。」

教材例 4

第二十三課 かぶと虫

寺田 寅彦

まだ小學校に通つてゐた頃、昆虫を集めることが友達仲間ではやつた。自分も古蚊張のきれで虫捕網を作つて、土用の日盛にも恐れず、毎日のやうに虫捕に出かけた。蝶や蛾や甲虫類のたくさんすんでゐる城山の中をあちこちと歩いて、永い日を暮した。二の丸、三の丸の草原には、珍しい蝶やほつたが多い。少し茂みにはいると、木の幹に玉虫とんぼがね虫あぶらむし米つき虫あかむしなどさまさまの甲虫が居る。草木の強い香にむせながら、胸ををどらせてこがね虫をねらつて歩いた。捕つて来た虫は熱湯や樟脳で殺して、菓子折の標本箱にきれいに並べる。さうして此の箱の数の増すのが楽しみであつた。



中捕から歸つて爽ると、體は汗で水を浴びたやう、顔は火のやうであつた。どうしてあんなに虫好きであつたらうと、母は今でも昔話の一つにしてゐる。年をとるにつけておもしろい事にもいろいろ、出會つたが、あの頃珍しい虫を見つけて捕らへ時のやうな喜は余りない。今でも、城山の奥の茂みの中に漂つてゐた朽木の香を思ひ出すことがある。

何時か城山の裾のお堀に臨んだ暗い茂みにはいつたら大きな木があつて、桃色がかつた花がこすゑを一面におほつた。散つた花は風に吹かれてみぎはに半ば沈んでゐる船に美しくちらばつてゐた。此の木の幹には處々虫の食入つた穴があつて穴の口には細かい木くづが虫の糞と共にこぼれかゝつて、一種の臭気を放つてゐた。見ると幹の高い處に、見事なかぶと虫がいかめしい角を立ててとまつてゐる。自分の標本箱にはまだかぶと虫のよいのが一つも無かつたので嬉しさに胸ををどろろかしながらねらひ寄つた。少し網が届きかねたがやうやうのことゝ捕れたので急いで腰の中籠に入れ、包みきれぬ喜をいだいて森を出た。

三の丸の石段の下まで来ると、向ふから美しいかうもりがさをさした女の人が子供の手を引いて、木陰伝ひに来るのに會つた。かさを持つた手に薬瓶をさげ、片手は子供の手を引いてゐる。子供は大きな新しい麦藁帽子のひもをかはゆいあごに掛けて、眞白な洋服のやうなものを着てゐた。自分のさげてゐた中籠を見つけると、母親の手を離れてのぞきに來たが、目を圓くして母親の方へかけて行つて、袖をぐいぐい、ひつばつてゐると思ふと、又中籠をのぞきに來た。母親は早くおいでと呼ぶけれども、なかなか自分の側を離れない。強ひて連れて行かうとする、道の真中にしやがんでしまつて、とうとう泣出した。

母親は途方にくれて叱つてゐる。此の様子を見てゐた自分は、俄に中籠のふたをあけてかぶと虫を引出し、道端の相撲取草を一本抜いて、虫の角をしつかりしばつた。さうして、さあといつて子供に渡した。子供は直に泣止んで、ままりの悪いやうな嬉しいやうな顔をすする。母親は驚いて子供を叱りながらも禮を言つた。自分はたまつて空になつた中籠を打振りながらかけ出したが、嬉しいやうな、惜しい

やうな、かつて感じたことのない心持がした。  
其の後度々同じ木の下へも行つたが、あの時のやうな見事なかぶと虫はもう見つからなかつた。又あの時の親子にも再び會はなかつた。

1—3 大正十五年版「高等小学読本」 文部省  
卷二（二学年用） 目次

第一課 農業	第十六課 年頭の一日
第二課 堀田瑞松	第十七課 都會と田舎
第三課 月の光	第十八課 上毛の三山
第四課 鎮守に詣でて	第十九課 ペートル大帝
第五課 社会奉仕の精神	第二十課 警察と国民
第六課 護国の目と腕	第二十一課 かにん
第七課 猫の垣巡（漱石）	第二十二課 村上義光
第八課 ビスマークの幼時	第二十三課 海苔
第九課 鱒釣	第二十四課 福澤諭吉
第十課 保険	第二十五課 人形を送る
第十一課 人を紹介する手紙	第二十六課 故郷の花（平家物語）
第十二課 エジプトの遺蹟	第二十七課 鳥の翼と昆虫の翅
第十三課 マルコ・ポーロ	第二十八課 奉天付近の大会戦
第十四課 植物と気象	第二十九課 学校園
第十五課 俳句	第三十課 国史に還れ

1—3—2 教材例  
卷二

第十一課 人を紹介する手紙  
拜啓寒氣漸相加り候處愈々ご清福賀し奉り候さて御存じの田代喜作氏の息喜太郎君並に小生隣家の畑謹一君今回当村青年團より選拔せられ近県農家副業の實況見学の爲御地に參る事に相

成候両君とも御地は始めてにて全く不案内の上見学につきての便

便宜も少き由に候へば何分宜しく御願ひ申上候尚両君には来る十五日早朝当地出發途中大野駅にて下車其の付近一見の午後同地出發の由に候へば御地着は多分同日夜刻と存候到着の上は早速御宅へ伺ふはずに候間夜分にて恐縮の至りに候へども何卒御引見なし下されたく候先づは御紹介かたがた御願ひまで敬具

瀬川清之助様

座右

年 月 日 豊田耕一郎

教材例 第三十課 国史に還れ

国史に還れ。日本国の歴史は、大和民族の系図なり。吾人祖先の功科表なり、日本国民の経典なり。日本国を知るには、歴史を通して知るより他に方便なし。国史は實に忠實なる案内者、信頼すべき指導者なり。

吾人は歴史的に考慮せざるべからず。平等観よりすれば総べての人類は皆同胞なり。されど歴史観よりすれば、総べて国出發は皆特殊の性格を具ふ。甲国と乙国とは同じからず、乙国と丙国とは同じからず、而して丙国と甲国とも亦同じからず。十国あれば十国の差異あり。百国あれば百国の差異あり。此の特殊の国性を維持する事によりて、始めて独立国の意義全うせらる。独立国の本義は形式的に、他の干渉を絶ち、自主の体面を保つのみならず、精神的にも、自主ならざるべからず。詳に言へば、精神的に自国の国性を把持し、保存し、開展せしめ、發達せしめざるべからず。

我が大和民族の誇は、日本の歴史なり。此の歴史の中には、必ずしも悉く正しき事善き事のみあるにあらず、必ずしも悉く敬すべ

く仰ぐべき事のみあるにあらず。人は神にあらず。人の所爲には種々の過失あり、罪惡あり。されど総括していへば、日本の歴史は、大和民族の恥辱史にあらずして光榮史なり。

如何に我が皇室が世界に比類なきものなるかは。国史 最も雄弁に之を語る。如何に我が国民が、一旦緩急あるに際して護国の精神を發揮せしかは、国史其の証人なり。又大和民族の中に、世界的偉人と比して一步も劣らぬ者、即ち世界的偉人と稱するに足る者を如何に多く生じたるかは、我が国史の明らかに示すところなり。我が明治天皇の盛徳大業も、此の国史の背景によりて始めて明白に、精詳に、之を會得することを得。即ち五戸條の御誓文の如きも国史の背景なきに於ては、唯一種の雄快なる文書たるに止まる。帝國憲法の如きも国史の背景なきに於ては、單に乾燥無味なる一法文に止る。

凡そ固陋頑冥の守舊思想や保守退嬰の島国根性や、若しくは詭激狂妄の危険思想や、浮華輕薄の模倣精神や、何れも我が国史を閉却したるために生じたるものといはざるべからず。現状を株守するも国史を知らざるがため。現状に不安なるも、国史を知らざるがため。国民的自信力を失するも国史を知らざるがため。うぬぼれ根性にて、醉生夢死するも国史を知らざるがため。

国史に還れとは、総べての國民に歴史家たれといふにあらず、唯日本國民として、日本の歴史の大精神を了解せよといふのみ。人或はいふ、我が国には天然の資源少しと。されど我が國民は豊富なる歴史を有せり。此の歴史は、實に日本の精神的宝庫なり。いやしくも國民的に生活し、且活動せんとせば、先づ此の宝庫に向つて、総べての物を求めよ。

(徳富猪一郎「國民小訓」に拠る)

女子用に差し替えられた教材

第六課 国字四書

第八課 グロチユースと夫人マリヤ

第十一課 人を紹介する手紙  
第二十二課 機

第二十八課 贈物

4-1-1 教材例

第五課 社会奉仕の精神

人は孤立して單獨に生活し得るものにあらず。一の社会をなして共同生活を營むにあらざれば、其の安寧と幸福とは得て望むべからず。共同生活を營む上に於て最も尊ぶべきは、己の利益を犠牲としても公共の福利を増進するの精神なり。之を稱して社会奉仕の精神といふ。

社会の福利を増進せんがためには、吾人の爲すべき所甚だ多しといへども其の第一歩は、互に他人に迷惑をかけざるにあり。道路を歩くには必ず左側を歩むが如き。集会・面会の時間を厳守するが如き。道路・河水に汚物を棄てざるが如き。皆是なり。次には公共物を大切にすべし。神社・佛閣・公園・共同井戸・共同便所等一般公衆の爲に存する物はよく其の存在の目的を解してつとめて之を保護し、かりそめにも破壊し。又は汚損するが如きとあるべからず。尚進んでは他人の利便をはかるべし。汽車・汽船・電車等の中にて、老人・小児の座席なくして當惑せるときは、直ちに席を譲り、道路に往來の妨となるべき石塊・木片等の散らされるときは、之を片附くるなど、日常容易になし得らるゝこと、数ふるに暇なかるべし。

英国少年義勇団の綱領に曰く。

団員は他人を助け。他人に對して有用なるべし。

有用

自己の快樂は勿論、其の安全を犠牲にすとも、他人に對してならんことを期せざるべからず。若し事に當りて処置に迷はば、先づ他人の利害如何を考へ、他人の利益を増進するの途を選ぶべし。常に他の危急を救ひ、傷病者を助くるの用意なかるべからず。毎日必ず他人のため一の善事を爲さざるべからず。

らず。

と。他日りつばなる国民とならんとする者は、少時より常に此の意氣・精神を持せざるべからず。

進歩したる社会に於ては、社会と個人との關係密接にして、公益は私益と不離の關係を有す。公益をはかるは即ち私益をはかる所以なり。而して公益をはかるの第一歩は、各、自己の職業を通して社会に貢献するにあり。職業は個人が社会の活動の一部を分擔して社会の繁栄を致すの道なれば。各自責任を以て之に當らざるべからず。もし職業を以て己一個の利慾をほしいまゝにするの手段となさんか、社会は各自の職業のために、却つて其の幸福と安寧とを破壊せらるゝに至るべし。

吾人は己の職業によりて社会に貢献すると共に、社会の福利の増進を直接の目的とする社会事業を尊び、之を助けて其の發展をはからざるべからず。即ち学校・図書館・病院・養老院・孤兒院等に対しては、皆出来得る限り之を援助するの心掛肝要なり。

凡そ文明国の国民たる者は、よく共同生活の眞意義を会得し、日常の生活の上に、各自の職業の中に。常に崇高なる奉仕の精神を社会に盡くし、変に臨みては一身を犠牲にして敢えて顧みざるの信念を持せざるべからず。

高等女学校の教科書

- 1-1-1 芳賀矢一編『改訂女子国文』富山房 大正一〇年一〇
- 一 明治天皇と世界の新聞 一八 旧藩の明君 其の一
  - 二 明治天皇の御製 一九 旧藩の明君 其の二
  - 三 ことばの話(自修文) 二〇 筑紫の旅
  - 四 吉野と嵐山 二一 漆器(自修文)
  - 五 池大雅と其の妻 二二 夏の草花
  - 六 仁和寺の法師 二三 植物と氣象との關係

- 七 我が父母 二四 愛すべき夏  
 八 父母のなさけ(自修分) 二五 狂歌  
 九 女子服飾の変遷 二六 十訓抄と著聞集  
 一〇 春夏の歌 二七 平等院  
 一一 神国の首都 二八 税所敦子君の棺の前に誅す  
 一二 祖先を崇び家名を重んず 二九 春の七草と秋の七草(自修文)  
 一三 マチソン夫人 三〇 秋夜  
 一四 勤儉 三一 淑女とは何ぞ  
 一五 医者 of 来るまで(自修文) 三二 空行く雁  
 一六 国民としての女子 三三 交際と文学の趣味  
 一七 原總右衛門の母

1-1-2 芳賀矢一編『改訂女子国文』 富山房

三 ことばの話 (二学) 年

佐々醒雪

不思議なものは、ことばの変遷である。日本語は幸にして近い記録を存してゐて世界で頗る古い言語一つである。而も萬世一系の帝室を戴いた同一民族の間のみ発達したので、今から約千年前に出来たといはれる「竹取物語」や「伊勢物語」を見ても、半分以上は、今日も平生使用してゐる言語で出来てゐる。こんな国はいふまでもなく、世界中に又とはないのである。一千年前即ち十世紀前と云へば、今の欧州列強国などは、皆全くの野蛮国であった。かく久しい時代を経てゐるから同じ語でもその意味は頗る変化したものが多し。

例へば、甚だしく変遷したものは「いへ」といふ語であらうは

「いへ」といふと家族とか家庭とかいふことで、随つて、「いへあるじ」といへば、一家族中の主長で即ち戸主のことであつた。然るに今日家といふと、家屋即ち建築物のことで、「いへぬし」は貸家の持主の義に用ひられてゐる。更に甚だしく変化してゐるのは、形容詞などに多い。例へば、平

安朝の人が「あはれなる人」といふと、大抵は美人のことである。我が貧民や薄倖者を「あはれなる人」といふのとは、雲泥の違ではないか。「かなし」といふ語も、今日では悲哀の義にのみ使ふが、古は極めて寵愛してゐる妻や子のことを、「かなしき妹」とか、「かなしくする兒」とかいつた。

かゝる変遷は、そんなに古い時代ばかりではない。漢語が頗る用ひられ初めてからも、同様の變化は認められる。例へば「不用」といふ語は、今日では「入用でない。」といふことであるから紙屑買が「御不用物は御座いせんか。」と呼んで来る。然るに中古では「不用なる者。」といふと、用ふるに堪へぬ頓間か痴呆ものので、更に降つて武家時代に入ると、「爲朝が不用であつたから、父爲義が九州に追つた。」などと記してあつて不用といふのは、いたづら者又は無法者の義である。鎌倉時代に「不用なものは御座いせんか。」と呼歩いたら、「いたづら者はないかね。」と呼歩く鼠取薬と間違へられたであらう。

これ等はまだまだ単なる變遷で、中にはその變遷の間に語源の意義に對して奇怪なる矛盾を生ずることもある。漢方医が廢れて薬を煎じることがなくなつても、薬缶と。いふ名は残つてゐたり、其他不思議な言葉を列挙すれば際限もないが、就中奇代なのは、「茶碗」や「さかな」である。日本でまだ立派な陶磁器の出来ぬころ、支那から渡つて来た上等の陶磁器は、専ら抹茶の席ばかりに用ひたから、これを茶碗といつたのである。然るに日本で硬い上等の物が沢山出来るやうになると、御飯を食べるにも番茶を飲むにも陶磁器を用ひはじめた。そこで飯食茶碗とか茶飲茶碗とかいふ不思議な語が出来た。今日では珈琲茶碗とさへいつてゐる。茶を飲むのが茶碗なら、飯を食ふのが珈琲茶碗とさへいつてゐる。珈琲碗とでもいひさうなものだが、さう理屈通りに行かないのが言葉である。

「さかな」とは、本来酒を飲む時に食ふものといふ語である。

「さか」は「酒樽」「酒盃」の「さか」である。「な」は何でも副食物にするものことで、古は野菜類は勿論皆「な」であるし、昆布や若布などの様な食べられる海藻は、皆磯菜といった。それから魚類は、「な」のなかの上等のものであるから、上等な建築用材を「ま木」といひ、屋根を葺く上等の草を「ま草」といふやうに、これを「まな」と稱へた。今の「まな板」「ま箸」などいふ語は、これから来てゐる。然るに酒といふものは、上戸即ち上等の家でなくては飲用しないし、且酒を飲む時は、今も昔も贅澤な副食物を求めることが普通であるので、自然魚類は酒席に多く供せられて、「さかな」といふ異名を得るやうになつた。既に魚類が「さかな」といふことに定まつてしまふと、下戸が食つても、やはりこれ「酒な」といふのは、飯を食つてもやはり茶碗といふのと、同じ不思議である。

言葉は又使つてゐる中に、段々下落するものである。例へば「大工」といふ語は工即ち工藝家中の俊秀の者の尊称で、多くの小工どもの統領を呼ぶ名であつた。然るに今日では建築事業にたづさはるものは、小屋掛けの叩き大工でも、やはり大工である。かの棟梁、親方なども同様で今日では、一人の手下もない、子分のない男でも、印袴纏さへ著てゐれば、即ち親方であり、棟梁である。

言語の変遷は、蓋し究極を知るべからずといふのが至当であらう。(醒雪遺稿)

1—2—1 芳賀矢一編『改訂女子国文』 大正七年一月富山房

卷八

長谷寺詣

幸田露伴

弓張月の漸う光りて、入相の鐘の音も収る頃、西行は長に着きけるが、問驚かすべき法の友の無きにはあらねど、問ひも寄らで、

観音堂に参り上りぬ。さなきだに梢透きたる樹々をなぶりて、夜の嵐の誘へば、はらはらと散る紅葉などの空に狂ひて吹入れられつ、法衣の袖にかゝるも哀に、また佛前の御燈明の瞬きし

つゝ、万般のものの黒み渡れるが中に、いと幽かなる光を放つも趣あり。法華經の品第二十五を声低う誦するに、何と無く平時よりは心も締りて、身に浸みわたる思のすれば、猶誠を籠めて誦し行くに、天も静けく地も静けく、人も全く静まりたる、時といひ、処といひ相応じて、我が耳に入るは我が声ながら、若しくは随喜佛法の鬼神などの、声を和せて共に誦するかと疑はるゝまで上無く殊勝に聞え渡りぬ。特に参りたるかひは有りけり。菩薩も定めしかゝる折のかゝる所作をば善しとして、必ず納受し給ふなるべし。今宵の心の澄切りたる、此の清しさを何に比べん。余りに有難くも尊く覚ゆれば、今宵は夜すがら、此の御堂の片隅になり跌坐して、暁方になほ一度誦経し参らせて、さて其の後香華をも浄水をも供して罷らん。」と、西行やがて三拜して、御佛の御前を少し退り、影暗き一隅に身をねぢ据ゑ、凍れる水か、枯れし木の、動きもせねば、音も立てず、寂然として坐し居たり。

夜は沈々と漸く更けて、風も睡れるごとくになりぬ。右左に並びて立ちたりける御燈明は、一つ消え、又一つ消えぬ。今はたゞいと高き吊燈籠の光朦朧として力なき炬をや圍みてあるらん、影だに終に見するもの無し。いふ可き方も無く静なれば、日比焼きたる余氣なるべし、今薫ゆるとにはあらぬ香の、有るか無きかに自ら匂を流すも、いと能く知らる。かゝるをりから、何者にか此方を指して来る足音す。御佛に仕ふる此の寺の者の灯燭をつぎまゐらせんとて来つるにやと打見るに、御堂の外は月の光白々として、霜の置けるが如くに見ゆるが中を、寒さに堪へでや、頭には何やらん打被きたれど、正しく僧形したるが歩み寄るさまなり。心を

留むとはあらざれど、何としも無く、なほ見てあるに、やがて月の及ばぬ闇の方へ身を入れたれば、定かには知れぬながら、此の御堂に打向かひて、一度は先づ拝み奉り、さて静々と上り來りぬ。御堂は狭からぬに、灯は螢ほどなり。灯の高さは高し。互の程は隔りたり。此方を彼方は有りとも知らず。彼方を此方は能くも見得ねば、西行はたゞ我と同じき心の人も亦有りけるよと思ふのみにて打過ぎたり。彼方は固より闇の中に人有ることを知らざれば、何に心を置くべくも無く、御佛の前に進み出でつ、いとつつましげにかしこまりて、数多度合掌礼拝し、一心の誠を致すと見ゆ。同じ菩提の道の友なり。其の心操の淺まならぬも、夜深の参詣に測り得たり。衣の色さへ辨ち得ざれば、面はまして見るべくは無けれど、浄土の同行の人なるものを呼掛けて語らばや、なをも問はばやと西行は胸に思ひけるが、率爾に物言はんは悪しかるべし。祈願の終わつて後にこそと、心を控へて窺うに、彼方は数珠を取り、さやさやとばかりすり始めたり。針の落つる音も聞べきまで、物静なる夜の御堂の真中に在りて、水精の数珠を擦る音の亮らかなる響、いと冴えて神々し。御経は心に誦するとおぼしく、萬籟絶えたるに、珠の音のみを唯緩やかに響かす。其の声、或は明らかに、或は幽かに、或は高く、或は低く、寢覺の枕の半ばは夢に霞の音を聞くが如く、朝霧晴れぬ池の面に、菌西の急に開くを聞くが如く、小川の水の獨り咽ぶか、雨の紫竹の友ずれか、山吹匂ふ山川の蛙鳴くかと過たれて、一声声中に萬法あり、「皆 実相不相違背」と、いとをかしくも聞きなざるれば、西行感に入。つてありけるか、期したる程の事は仕果てしにや、其の人珠敷を収めて、御佛をば礼拝すること数多度しつ、やをら身を起して退らんとす。菩提の善友、浄土の同行、契を此の上に結ぼんには今こそ言葉を可けれど、

思ひ入りて擦る珠数の音の声澄みて  
おぼえずたまる我が涙かな

と、歌の調は好かれ悪しかれ、西行俄によみかくれば、彼方は始めて人あるを知り、思ひかけぬに驚きしが、「何と仰せられしぞ。今一度。」と、心を押鎮めて問ひかへす。聞きとりかねけんと思するまゝ、「思ひ入りて擦る珠数の音の声澄みて。」と復び言へば、後は言はず、「君にておはせしよ。こはいかに。」と涙にふるふおろおろ声、言葉の文もしどろもどろに、身を投伏して取附きたるは、声音に紛ふかたも無き、其の昔の我が妻にぞありける。——二日物語——

\*『長谷寺詣もうで』での実践事例を〇〇頁で考察している。参照されたい。

2—1 広島高等師範学校国語漢文教授研究会編 「中等国文」

巻五 目次

- |    |               |               |    |             |       |
|----|---------------|---------------|----|-------------|-------|
| 一  | 月雪花           | 芳賀矢一          | 一七 | 島の爲朝        | 滝沢馬琴  |
| 二  | 国語と国家         | 上田萬年          | 一八 | 杉田耆岐        | 室 鳩巢  |
| 三  | 戦後の倫敦より (書簡文) | 高石眞五郎         | 一九 | 西行法師        | 新保磐次  |
| 四  | 欧州戦乱の教訓       | 野上俊夫          | 二〇 | 西 行         | 上野松峰  |
| 五  | 英国民の一特性       | 杉村楚人冠         | 二二 | 仁和寺の法師      | 兼好法師  |
| 六  | 服従と独立         | 徳富蘇峰          | 二三 | 禁庭の野分       | 昭憲皇太后 |
| 七  | 猫と雑煮          | 夏目漱石          | 二四 | 玉の御声 (和歌)   | 御作    |
| 八  | 晩春の別離 (韻文)    | 島崎藤村          | 二五 | 水車問答        | 徳富蘆花  |
| 九  | 亡き友           | 大町桂月          | 二六 | 越前九郎兵衛      | 新井白石  |
| 一〇 | 雨の興味          | 松平樂翁          | 二七 | 西郷隆盛論       | 尾崎行雄  |
| 一一 | 春の海 (俳句)      | 菊池 寛          | 二八 | 西郷隆盛に与ふ山県有朋 |       |
| 一二 | 敵討            | 矢野龍溪          | 二九 | 空論を避くべし     | 丘浅治郎  |
| 一三 | ハンニバル         | アルプスの山越 (書簡文) | 三〇 | 相模灘の落日      | 徳富蘆花  |
| 一四 | アルプスの山越 (書簡文) | 塩井雨江訳         | 三一 | 月の洞庭        | 佐々木信綱 |

- 一五 比叡山 近松秋江 三二 空行く雁 曾我物語  
一六 琉球の情趣 昇 曙夢

広島高師教科書 巻五

琉球の情趣 昇 曙夢

東京でも時々歌はれる俗謡に

琉球におぢやるなら

草鞋穿いておぢやれ

琉球は石原小石原

といふのがある。これによると、琉球はいかにも殺風景なところのやうに思はれる。が私の想像に描いてゐる琉球は、決してそんなものではない。事實は或は俗謡の通りであるかも知れないが、でも、私は琉球をそんな風に考へたくない。

琉球は古代の珊瑚礁から成立つてゐて、今日石原の多いのは、その珊瑚礁が長いタイムの間に砕けたからだ。しかもそれが一種の風致を添へて、風光の明媚なこと他に比類がない。いろんな植物がよく野外に育つて、その中にはフィリピンやマレーあたりから渡来したものも多い。曾て三好理學博士は、「自分は熱帯の各地方を旅行して来たが、まだ沖縄のやうな愛らしい熱帯的景色の現はれてゐる島は、これまで見たことがない。」といはれたといふことである。

琉球は、南欧清明の空を偲せるやうな透き通つた麗らかな晴晴とした青空の下に、芭蕉葉茂り、榕樹蟠り、梯梧花咲き、阿丹木の赤い実を結ぶ美しい国である。あたりは海を繞らして、経緯度も熱帯に近く、黒潮は常にその岸を洗うて様々の異木に富み、珍草に飾られてゐる。随つて天恵が豊富で、生活に余裕がある。余裕があるから、自然遊芸の道に入りやすい。琉球人が一般に芸術的天才に富んでゐるのも、また彼等の間に所謂平民芸術の発達してゐるのも芸人の多いのも、一はそれがためである。彼等は常

住不断糸竹管弦の音を絶やしたことはない。口を開けば忽ち朗々絃歌の声、手を動かせば翩々たる舞袖の匂彼等こそは実に生れながらの芸術家ではあるまいか。

夕風一たび津々浦々の面を渡ると、いつの間にか夜の帳は海島に落ちて、あとは神秘の世界となる。・燦たる天の星影、月

の煌

めく濱の眞砂、巨人のやうな雲のたゞずまい、太古のやうな岩の

姿

千尋の底に沈んでいくやうな蛇皮線の音、波の囁き、やがてどこからともなく、悲調を帯びた船歌が聞えると、夕闇の中から微妙に櫓声が響き、沖には淡い夢のやうな漁火が点々として浮かんである。・実に琉球は到る処に詩がある。

曉風一過、零れる露に夏の夜の夢は早くち破れて、海から明け初める島山のみづみづしさは、また言ひ盡くされな美である。鮮かな南方の日光、濃い草の色、強烈な花の匂、芭蕉葉のそよぎ、深碧の海、潮の香、一として刺激の種子でないものはない。刺激が多いところから、自然想像力も豊富である。椰子の囁きを聞きながら、四時緑なす榕樹の陰に、桃源の夢を結んでゐるのが琉球民族ではないか。少なくとも、世界に特色ある藝術を生み出した古の琉球人は、正しくさうであつた。彼等の歴史は、さながら神話である。

彼等の生活は今も著しく詩趣を帯びて、すべてが原始的である。支那の華胥の国、日本の竜宮は、必ずしも今の琉球を指したものでなくとも、いかにもそれらしい趣のある傳説の島である、夢の国である。

この南方の暖かい夢の国は、同時にまた詩の世界であり、芸術の郷土であつた。かの国の過去には、幾多の秀逸な文芸・詩歌の花が咲いた。我が大和民族の曙を偲ばせるやうな太古の余韻が、国の退廃的気分と混じて、今日獨得の藝術を作つてゐる。

広島高等師範学校国語漢文教授研究会編 「中等国文」

卷十 目次

一	詩とは何ぞや	徳富蘇峰	一五大御代のしつけさ (和歌)
二	秋姿の瞑想	綱島梁川	一六 和歌の道 太宰 春台
三	世界の四聖	高山樗牛	一七 正月
四	菅公の左遷	大 鏡	初春の朝 紫式部
五	望郷の歌 (韻文)	薄田泣菫	正月一日 清少納言
六	新院御遷宮	保元物語	あらたまの年栄華物語
七	白峰陵	滝沢馬琴	春の光 足立弘魚
八	須磨の閑居	紫 式部	四時の始 貝原益軒
九	小原	平家物語	松の内の夜 尾崎紅葉
一〇	今様		一八 船路 紀 貫之
一一	頼山陽	朝比奈知泉	一九 鉢の木 (謡曲)
一二	徒然草より	卜部 兼好	二〇 狩場の嵐近松門左衛門
	暫くも住せず		二一 五重塔 幸田露伴
	あやしみの竹の編戸の		二二 石つぶて (劇) 坪内逍遙
	人の物を問ひたるに		二三 文学と人生藤井健治郎
一三	新年祭の祝詞 祝詞式		二四 日本の文化 清原貞雄
一四	萬葉集より		

○ テーマを核とする単元展開に例

一七 正月

榮花物語

長和三年になりぬ。正月一日よりはじめて新しくめづらしき御有様なり。あらたまの年立ちたちかへりぬれば、雲の上もはればれしう見えて空を仰がれ、夜のほどに立ちかへりたる春のかすみも、紫に薄くこくたなびき、日の景色うららかに光さやけく見え、百千鳥もさへづり

まさり、よろづ皆心あるさまに見え、枝になかりつる花も、いつしかとひもをとき、垣根の草も青みわたり、朝の原も萩の焼原かきはらひ、春日野の飛火の野守も、萬代の春の始めの若菜をつみ、水とく風もゆるく吹きて枝を鳴さず、谷の鶯も行末はるかなる声に聞えて耳とまり船岡の子の日の松もいつしかと君にひかれて萬代を経んと思ひて、ときはかきはの色深くみえ、もたひのほとりの竹葉も末の世遙に見え、はしのもとに薔薇も夏を待顔になどして、さまざまめでたきに、朝拝より始めて萬にかしきに、宮の御方の女房のなりども常だにあるに、まいて物鮮かにかをり深きもことわりと見えたり。

四時の始

楽訓

貝原

益軒

時は今は四の時の始めなれば、空の景色やうやう引き変へ、こち風ゆるく吹きて氷解け、遠き山辺に霞の薄く棚びける、さまざまに物けざやかに見えて、冬の空にたち変わるよそほひ、まづ春の来たれるしるしあらはなり。垣根がくれに冬より残れる雲の、ところどころはだれに見ゆるも、去年の名残惜しむべし。待ちわびし梅のにはひ百花に先だち春の消息を得て喜ぶべし。谷を出で高きに遷る鶯の春を迎えて物若き声、初春の初音の今日にあへる、耳とまりてこほしく、花ならで身にしむものならし。花を愛で鳥を羨むは、これ先春のたまものなり。之をはじめとして、猶行先遙に栄ゆる春の豊なる恵たのものなり。千年を経べき緑の松も、今一入の色をまして、常に見馴れしも、いやめづらしくなづさはれぬ。韓文公が、が、「最も是れ一年春好き処。」といへりしは、早春の景色、一年の中にて殊に珍らかに優れたる故なるべし。

松の内の夜

金色夜叉

尾崎

紅葉

元日快晴、二日快晴、三日快晴と誌されたる日誌を流して、此の



黄昏より凧は戦ぎ出でぬ。…中略…

人此の裏に立ちて寥々冥々たる四望の間に争か那の世間あり、社会あり、都あり、町あることを想ひ得べき。九重の天、八際の地、始めて渾沌の境を出でたりと雖も、萬物未だ盡く化生せず、風は試に吹き、星は新たに輝ける一大荒原の、何等の旨意も、秩序も、趣味も無くて、唯濫にひろく横たはれるに過ぎざる哉。日の中は宛然沸くが如く楽しみ謳ひ、酔ひ、戯れ、歎び、笑ひ、語り、興ぜし人々よ。彼等は儂くも果てし子子の形を斂めて、今將に何処に如何にして在るかを疑はざらんとするも難からずや。多時静かなりし後、遙に拍子木の音は聞えぬ。

(広島高等師範学校国語漢文教授研究会編中等国文) 卷拾

広島高師本は、「一七 正月」に見られるように、題材の関連性を観点として教材を選択配列している。当時の教科書は、G生徒の読解力と生活への関心の広がり配慮して教材を配列するのが一般であった、「題材関連」で複数教材を配列しているのは、学習者の心理に配慮した新しい工夫であった。

この教材は、学習活動を多様に組織できるであろう。六作品の着想・文章構成・文体を比較考察をする、「正月」を素材とした作品を探索して「正月文集」作る、など。

### コラム 辞書の複数購入

宮城県第一女子高等学校の学校研究テーマは「個性教育・自学のの良習」であった。教授法研究会を六部会に分けて毎月一回開き、教授法の研究・授業参観・相互の連結を図る活動をこなした。その成果として映画教育がこなわれ、辞

書使用の奨励などがおこなわれた。辞書使用の奨励は、毎日の通学に一々大きな辞書を持参させることは取り扱い上不便な結果、とかく辞書を使わなくなるので、学校に常置することによっておこなわれた。『学校史』には次のように報告されている。

「大正十三年四月の新学期から学友会に於て相当辞書を備付け、随時教室に於て使用せしめることとし、大いに便宜を得て居ります。その費用として新入生徒から一人一円の人会金を徴集することとし、目下備付の辞書は英語三〇部、国語二八部、漢文

一三二部です。(百周年史編纂部『二女高百年史』一九九七年宮城県第

一 女子高等学校 一〇八頁)

教室で使用するには十分な量ではなかったが、個性をのびし、依頼心を除き独立の人格を養成しようとする方針の延長上に、この「自学の良習」があった。

2-2-1 大槻文彦著『修正日本文法教科書』 例言

一、教授法の示せる所に拠りて、一新事項を授けむとするには、いづれも、初に、例を挙げて、後に、定義法則を教へ、終には応用すべき練習題の一斑を与へたり。

二、書中の引例は、學者の常に耳目に馴れたる卑近なるを旨専ら中等程度の諸学校の下級に用ゐらるゝ各学科教科書の語句より、多く材料を採り、その間には、口語、または、書翰文体なるをも交へたり。歌句を引用するとは勉めて避けられど、その人口に膾炙せるもの、又は、学生の、小学生このかた、学び来れる唱歌の語句の如きは、採て処々に加へたり。聊か趣味を添ふるに足らむか。

四、綴文の題を、処々に挿みたるは、習ひ得たる文法の智識を明かならしむるに、必要なる方法ならむと思ひ、又、これにより今の國語教授上にもりかちなる、読書と作文とかけはなる弊を濟さんき助ならむ、とも思ひてなり。

五、此種の教科書にては、例題の選択に最も注意すべきは、いふまでもなし、書中、各章の終に載せたる例題の如きは悉く學者の習得し来れる智識に拠り、自ら發明して解し得べきを度したり。第一章、乃至、第八章の諸題に、転成の品詞、熟語等をまじへざるが如き、その一例なり。

上巻 目次 下巻 目次

総説 音韻編 (\*仮名遣い、等)

第一章 助動詞の意義 第一章 助動詞の意義

第二章 動詞 第二章 助動詞の誤  
 第三章 形容詞 第三章 弓爾平波の承け方  
 第四章 助動詞 第四章 感動詞の承け方

第五章 副詞 第五章 複文  
 第六章 接続詞 第六章 結法  
 第七章 弓爾平波 第七章 呼応  
 第八章 感動詞 第八章 温習雜題  
 第九章 品詞  
 第十章 熟語、疊語、接頭語、接尾語  
 第十一章 動詞の用方  
 第十二章 形容詞の用方  
 第十三章 単文

「第五章 副詞」については次のように記述されている。

第五章 副詞

例一、徐に読め。

例二、力、頗る強し。

例三、稍しばし考ふ。

例の一なる「徐に」は「読め」といふ動詞に副ひ、例の二なる「頗る」は、「強し」といふ形容詞に副ひ、例の三なる「稍」は、「考ふ」といふ動詞に副ひたる「しばし」といふ副詞に、重ねて副ひて、いづれも、それぞれ、副ひたる語の意義を修飾す。これらを副詞といふ。次の諸文の中の副詞をその修飾せる語と共に示すべし。

- 一、明治十年一月、西郷隆盛、遂に兵を九州に挙げ、
- 二、喇叭の声、いと勇まし、
- 三、われも、かならずゆかむ、
- 四、おもしろき夢の忽ち覚めしは、甚名残惜しかりき、
- 五、わが伯父なる人は、かつて札幌に住みき、
- 六、友、また来しかど、われ、また居らざりき、
- 七、入学願での日限、いまだ切れざるに、願人は、はや定員に満ちたり、
- 八、かの地に御逗留の中の御話、ちと承りたく候。

九、なほ、かはらず御引立下されむ事をひたすら願ひ候。  
十、吹くからに、秋の草木の、しおるればうべ山風を、嵐といふらむ。  
副詞は、動詞、形容詞、或は他の副詞に副ひて、その意義を修飾する語なり。(三二頁〜三四頁)

下巻「第八章 温習雜題」は自習用、または全卷学習後の復習問題三〇題と漢文を国文に「書き下す」問題一〇問が提出されている。

2-2-2 山田孝雄著『中等文法教科書 卷一』明治四〇年十二月  
訂正再版 宝文館

本書は、「例言」において、編纂の趣旨、活用法などについて九項目に亘つて述べている。その内、三つの項目を引用しよう。

一、本書は之を五巻に分かつ、巻一より巻四に至るまでは現在普通の文に関する法則に限り現時談話語に関する事実を参照し、更に徳川時代以前に遡らず、これ普通教育としてこの知識の確明瞭ならむことを急務とすべきものと信ずればなり、巻五にて始めて近古以上の文に関する事実を教へ、かねて、古今東西の比較をなし、以て理論文法的一端を授くることとせり。

一、各章問題及練習を設く。これ既授の智識を鞏固にし、之を復習するに止まらずして、之を応用拡張せしめむが為のものなり。この故に既授の事を基礎として、知りうべき新しき事実をも学ぶやうにせり。されば問題及び練習は応用にして同時に授与の一部なり。この点は教授者諸君の活用を希ふ所なり。

一、実例及練習題は著者の特に苦心したる所にして生徒の学力に適応せしめむを努めたり。その最大部分は小学校国定教科書(尋常小学より高等小学二年まで)及落合芳賀二氏の読本より各学年相当のものにつきて選択したり。その他の大部分は中学程度の普通学教科書(数学、博物、地理、歴史、等)より取り、従来の文法書に載せたる例及著者の考案によれるものは止むを得ざる場合に限り、その数極めて僅少なり。

一、本書は各巻週一時間の教授時にて完了しうるものとす。若毎週一時間の教授をなさむとせば、毎二巻を一学年に配当するを可とす。(同前書一〜六頁)

#### 目次

第一章 国語と国文	一 第八章 形容詞
第二章 話語と文語	一 第九章 動詞
第三章 単語と句	一 第十章 助動詞
第三章 単語と句	一 第十一章 助詞
第四章 名詞	一 第十二章 副詞
第五章 代名詞	一 第十三章 感動詞
第七章 体言と用言	一 第十四章 連語と句
	一 附録 仮名遣法大要

「第十二章 副詞」については次のように記述されている。

#### 第十二章 副詞

文分の説明をなすは、用言の役目なるが、この用言のみにては十分に説明をなしはたすことを得ざる場合あり、その時にはこの説明の意義を明にせむが為に副ふる単語有り。

あゝ諸氏は既にことの意を悟りたらむ。

これを全国の上より観ればその利害甚だ大なり。

椿はぼたりぼたり落ち落ちて地も紅なり。

…後中略…

上文の「既に・甚だ・ぼたりぼたり」は皆下なる縦線を施せる語の説明を一層明らかにせむが為に副へたる単語なり。かくの如き単語をば副詞と名づく。

副詞とは説明を明瞭にせむが為に副ふる単語なり。

問題一 副詞とは何か。

二 副詞は如何に用ゐらるか。

三 勉強と運動に関して用ゐらるべき副詞の例三をあげよ。

練習一九 次の文中の副詞を指し示せ。

一やがて日は紅の球を残して山に落ちぬ。

二ここに専ら手工業のみ行はれき。

後略

練習二〇 次の文中に適當なる副詞を補へ

一、巴里の遊園は倫敦のに比ぶれば〇〇狭く数も〇〇少なし。

二、その定めなきこと〇〇浮雲の如し。

三、〇〇世の模範たらむには心術を正しくすべし。

四、職務に従事するには〇〇時刻を定めおく可とす。

五、地球上に奇觀多しといへども〇〇ナイアガラの瀑布に過ぎたるはなからむ。

2-3 漢文教科書

2-3-1 井上哲次郎編「中学漢文教科書 卷一」

目次

- 0 読法 一 桃及び桜 二 漢字 三 天下一(角田九華)
- 四 冀有益国家(角田九華) 五三種神宝(舍人親王)
- 六 伊勢神宮(青山鉄槍) 七 明治天皇(岡田正之) 八 古語
- 九 楠公祠(王籟) 十 格言 十一 小英雄(1井伊直孝) 2徳川
- 光圀 3水足博泉 十二 東照公(中村栗園) 十三 諺語
- 十四 父母 十五 風樹の歎(服部南郭) 十六 伯愈悲泣(劉向)
- 十七 格言 十八故事 十九何偽之有(原念齋) 二〇穿壁引光(班固)
- 二一 仁智不凡(朱子) 二二 拿破倫理(岡本葦庵) 二三 孟母断機
- 二四 惜分陰(原念齋) 二五 恃長日拙(中村立園) 二六盛年不重来
- 二七 偶成(朱子) 二八龜兔賭走(岡田正之) 二九油断大敵(角田
- 九華) 三〇 季札守信(李翰) 三一 華盛頓(岡鹿門) 三二 熟語
- 三三 重師(安井息軒) 三四 先生第二之父(岡田正之) 三五格言
- 三六 元就戒諸子(中村立園) 三七鴉好訣(莊愈) 三八擇交(広瀬淡窓)

- 三九格言 四〇 白石薦朋 四一 慎所與処者 四二 格言
- 四三 二友(杜亞泉) 四 諺語 四五 允顔談経 四六 伊卒符
- 四七 格言 四八 三名医(土屋鳳洲) 四九 一些字(東条琴台)
- 五〇 咬菜軒(中村立園) 五一 格言 五二 家康節儉(青山拙齋)
- 五三 大樹將軍 五四 義家学兵法 青山拙齋 五五 八幡公(頼山陽)
- 五六 平景政(水戸義公) 五七 故事 五八 東晋明帝(曾千先)
- 五九 黒田如水(中村立園) 六〇 人無數(呂洞賓) 六一(戊辰作)
- 六二 羊罵狼 六三 守株(韓非子) 六四 東海道第一勝
- 六五 忠興壁喻(塩谷岩陰) 六六 梓礪之功(杜亞泉) 六七 格言
- 六八 梟逢鳩(劉好) 六九 函人(角田九華) 七〇 武將宜如此(中村
- 栗園) 七一 仙台(川北梅山) 七二 熟語 七三 幾萬愛兒(土屋鳳洲)
- 七四 秀忠沈重(塩谷岩陰) 七五 格言 七六 秀康威兒(青山拙齋)
- 七七 信長改過(頼山陽) 七八 太閤雜事(大槻磐溪) 七九 諺語
- 八〇 梁上君子(范曄) 八一 藤原兼光(水戸義公) 八二 兼山遠慮
- (原念齋) 八三 甘藷先生 八四 古語 八五 喻言(依田学海)
- 八六 憫農(李紳) 八七 蚕婦(無名氏) 八八 横梁賦詩(青山拙齋)
- 八九 謙信義勇(頼山陽) 九〇 故事 九一 道灌築城(重野成齋)
- 九二 小川泰山 九三 何待来年 九四 除日講起(原念齋)
- 九五 尋胡陰君(高青丘) 九六 夜宿山中(杜甫) 九七 江雪(柳宗元)
- 九八 四時(陶淵明) 九九 復有十四歲乎(頼山陽)
- 一〇〇 牛董温和(中村敬宇)

教材例 「中学漢文教科書 卷二」

二二 仁智不凡

宋文彦博、幼時與群童擊毬。一兒擊毬、入柱穴柱、不能取。彦博以水灌之。毬浮出。

司馬光、幼與群兒戲。一兒墮大水甕中、已沒。群兒驚走不能救。光取石破甕、兒得出。識者知二人之仁智不凡矣。(宋名臣言行録)

2-3-2 塩谷温篇編『漢文新編 卷三』(大正十年十月)

『漢文新編』は、五冊(卷一、卷五)刊行された。本書各巻の構成には特色がある。すなわち、各巻ともに「内編 名家文鈔」(約八〇頁)と「外編」(約九〇頁)に二分し、「内編 名家文鈔」には主として日本人の文章と中国の詩及び「論語」を採録し、「外編」には長編録している。「外編」には、第一学年「日本外史鈔(河中島之戦 他)」、第二学年「日本外史鈔(源・平氏 他)」、第三学年「十八史略鈔」、第四学年「史記鈔」である。第五学年(未見)。

『漢文新編』の内容

塩谷士健加冠祝辞 (星野恒)	鍛工助弘伝 (菊池 純)
記沖島回遊事 (塩谷時敏)	泊天草洋 (頼 襄)
論語抄	練心膽論 (中村 和)
望廬山瀑布 (李 白)	山行 (杜 牧)
前兵児謡 (頼 襄)	西郷南州伝上・下 (土屋 弘)
偶感 (西郷隆盛)	偶成 (木戸孝允)
題南州先生終焉碑蔭 (練言) (塩谷時敏)	反射炉碑 (三島 毅)

教材例 塩谷温篇編『漢文新編 卷三』

題南州先生終焉碑蔭 (練言) (塩谷時敏)

謂為叛賊乎。翼賛中興之業者、非先生耶。謂為元良乎。顯捐高見良一个。作甕島之亂者、方先生以西藩一陪臣、首唱大義、決機定策、收復七百年既墜之大權何其偉也。征韓議不愈合、挂冠帰郷、少壮子弟所逼、遂與之偕死而不悔、豈其本心繼乎哉。蓋先生之志、始終在尊王。不幸被賊名、誠可悲也。歲歲辛亥一月、余遊可甕島、觀城山洞窟賞、想從容就死之壮、快俯仰低回不能與去。誰耶、能援筆顯先生之大節者。噫。(訓点省略)

『中学漢文教科書』は、緒言に「倫理、文芸、地理歴史、伝記」を採録すると書いているとおり、題材の領域は広く長短百篇の文章を採録している。博学多識を期待しているかのようである。ただし、それは「伊勢神宮」・「甘藷先生」のように既知のことを漢文で表現しているものが多く、生徒には親しみやすかったであろう。

「亀兎賭走」・「鴉好諛」などのイソップ物語の漢訳あり、「華盛(ワシントン)」・「牛董(ニウウトン) 温和」など西洋偉人の伝記あり、広く知識を世界に広げている。このことも馴染みやすい教科書にしている。

親しみやすく馴染みやすい文章を多読することによって、漢文訓読法を自然に身につけることを期待しているようである。

『漢文新編』の教科書一冊を内編と外編に分ける構成法は、有効な一つの方法であろう。外編によって長編を継続して読むと深い学習が可能になると思われる。

二つの教科書に共通している点は和漢文の教材化が多いことである。この時代の特徴であろう。漢文古典の教材化という観点よりも当代に必要な「倫理・地理歴史・伝記」を与えたいという観点が強く働いている。

九 国語科学習指導の実際

1 言語生活の指導

1-1 教育話法

明治四一年四月に開校した横須賀中学校では、同年四月から大正二年三月まで校長以下職員が会同して「決議録」を残している。就任・登校時間・日誌・所願届け書・教室・生徒心得、等、計百二十項目に亘る微細な「取り決め」である。

その「教室」の項には次のような、「教師・生徒の氏名の呼び方」の「取り決め」がある。

(十六) 教師、生徒の氏名を呼ぶときは、「サン」或は「君」と言わず呼捨てにすること。その他生徒に対する言葉遣いに順すること。

禁止語	代用語	禁止語	代用語
アンダ	あなた	クナエ	ください
アバエン	ゆきませう おいでなさい	ケル ケツカラ	あげる くれる
イガエ	ゆきなさい おいでなさい	ソダエカ ソダベカ	さうでせうか
イツチャワ	いいでせうよ	ソダエツチャ ソダベツチャ	サウデセウ
イクスカナイ	いやです	ソツシヤ ホツシヤ	さうです
オレ・オラ	わたし	ホツシヤ	さうです
ガエ	いらつしやい おいでなさい	チャッコイ ヤンダ	ちひさい いやです
ガエン	ございません	イシタ	をります
キエン	まゐりません	フセサエ	をしえなさ
ガス	あります ございま す	スベ	くるでせう

(十七) 教師、生徒の氏名を呼ひだるときは、生徒をして「ハイ」と応えて直ちに机側に直立せしむること。(十八) (略)

(十九) 生徒、教師の指名を受けて教壇に立ちて演習する際は、その始終に必ず教師に向かい敬礼せしむること。(『神奈川県立横須賀中学校高等学校八十年史』一九八九年十一月 二五頁)

「生徒心得」の第三章「言語」には、「言語」簡単明瞭ナルベク冗長野鄙ナルベカラズ」とした上で、次のような箇条がある。

第十二条 尊長ヲ呼ブニ(先生又ハ「アナタ」ト謂コト己レヲ呼ブニ其ノ名又「ワタクシ」ト称スベシ朋友間ニテハ他ヲ呼ブニ君又ハ「何サン」ト謂ヒ対話スルニ君又「アナタ」僕又ハ「ワタクシ」ト称スベシ (同前書 三六頁)

教師と生徒との関係を「敬語の使用・不使用」によって明確に区別するように指導している。尊長を呼ぶには「先生」又は「あなた」、自称は名前又は「ワタクシ」、朋友は「君」又は「何サン」と呼ぶ、としている。学校開設に当たって「教育話法」を取り上げていることに注目したい。

### 1-2 方言の矯正

宮城県第一女子高等学校では、大正十一(一九二二)年より方言矯正の指導が計画的・組織的におこなわれた。生徒の使っている方言を調査して上表のような「禁止語」制定し、各教室に掲示した。組によってはこれを使った生徒に「当番」を課した。

なお、同校は、上表のほかに、次のような言い方も禁止していた。  
「預けた」といふべきを「預った」、「出来た」(結了、完成の意味)を「出た」、「出る」(前進の意味)を「出来る」

「始める」ことをして「はだづ」(百周年史編纂部『一女高百年史』一九九七年宮城県第一女子高等学校 一一二頁)

明治期後半に、愛知県第一高等女学校では、毎年海軍記念日（五月二七日）の講話の後に、学校で選定した『日用文字』をテキストに、仮名の部を見て毛筆で書取りをする試験をしていた。

日用文字は学校が選定した熟語

一一五六語（例 き——求積 仇敵 牛乳 喜悅 揮毫 等）で、選定方針は次のとおりであった。

一、文部省国語調査会査定の常用漢字表に準拠し、實際生活の要求に鑑み、日常必須の語を選び之を習得すると共に、文字を正確に記憶せしめるために作った。

一、語は日常普通の上品なものと、尋常小学校国語読本にあるものはなるべく之を採用。

一、通常、音、訓、又は名詞・助詞両用に使せられるものは、その慣用の広きものに従った。

一、特別な読み方をするものは、最も普通に行はれてゐるもののみを採用。

一、熟語構成には、なるべく同一文字の重出を避けた。

一、国語調査会で選定した略字は正字の下に付記して、之をも記憶せしめることにした。（愛知県第一高等女学校史編集委員会編『愛知県第一高等女学校史』一九八八年三月 同刊行会 八七頁）

生徒は漢字と仮名の『日用文字』二部が与えられ、毎日、勉強のほかにこれを習得することになっていた。成績の優秀な者は表彰され、とくに成績の悪い者は注意された。

同校の学校史によると、生徒の学力水準は全国的に見ても上位にあったが、それを育て上げ支え続けたのは、「日用文字」を初めとする反復学習の徹底にあった。卒業生の思い出にはほとんどの者が「日用文字」

の反復練習にふれている、と述べている。「日用文字」の漢字表は、語彙学習のための学習基本語彙集でもあった。一種のシソーラスの機能も持っていて知識を広げる役割を果たしたのである。

補注 一九二〇年代（明治末年から大正期）に『日用文字』と題する

副教科書または社会人のための実用的学習書が刊行されていた

（次の二点等）。

1、玉木愛石編書『習字兼用新編日用文字』一九一二年十一月

月 久栄堂書店

2、加藤美倫著『日用文字机上便覧 是丈は心得おくべし』

## コラム 漢字の節減・仮名づかい整理

一九二二（大正十）年臨時国語調査会設置。漢字の節減・字体の整理・仮名づかい整理に対する成案が発表された。その中の漢字の節減が新聞紙や出版物に実現される道が開かれた。ことに中橋（徳五郎）文相の一大功績は公用文書に口語文を広く実行すべく努力されたことで、省内の文書はすべて口語体によることとし、各種の訓令を口語化して官報に掲載されたので、これには非難の声もあったが、すこしも顧慮するところなく進まれた。そのうち各新聞社も社会の状況に促されて新聞の記事が口語化するようになった。かような状況になってきたので、国鉄や郵便局、また各商店の公衆に対する告示・掲示・広告等の文章はまたたくまに口語化してしまった。これはまったく中橋文相の努力の結果にほかならない。

……中略……

もう一つ中橋文相について語るべきことがある。それは、文部省内の官僚氣を一掃するに注意されたことである。その一例をあげてみると、高等官食堂では、これまで大臣・次官・局長から、その他の高等官は、任官の順序により食卓に着き、これを乱すことができなかったのであるが、中橋文相はこの極端な官僚式を改めようとして、食堂には小食卓を置き並べ、任意に着席することにした。大臣や次官や局長もあいている席に着くのであるから、いろいろな人と話す機会もできて、自然に融和して民主的になり、また食事の際事務の打ち合せもできて非常に便利であった。

（保科孝一『ある国語学者の回想』一九五二年 朝日新聞社 二八四頁）

## 2 「購読」の授業

### 2-1 大村はまが受けた川島治子（捜真女学校）の授業

大村はまは、一九一九（大正八）年三月横浜市の元街小学校を卒業し、四月に共立女学校（ミッシヨン）に入学したが上級学校への進学の道が開かれていなかったもので、一九一九（大正八）年九月捜真女学校に転校し、そこで川島治子（国語）、小倉遊亀（絵、習字）の教えを受けた。

川島治子は、生徒一人ひとりの発言を黒板に書いて授業を進めていった。

先生は、わりあい細かい字をお書きになる方でしたが、黒板の端から端まで私たちの答えを、一つ言うと一つ書き、どんどんどんどん書いていらつしやいます。書ききれなくなると、背が低いのに伸び上がって、上の方へもお書きになりました。誰の答えもお捨てにならないかったこと、（中略）みんなが力いっぱい考え、それを発表するのが楽しい、そういう気持ちにさせたということは、すばらしいことだと思っております。」（1 大村はま『大村はま自叙伝 学びひたりて』二〇〇五年十二月 共文社 一九〇頁）

一人ひとりの発言を大事にして、発表が楽しくなるような授業を作り出していたのである。

また、大村はまは、川島のすすめで「本を写す」という「読み方」をしていた。その内の一冊に川島から借りて写した『綴り方十二ヶ月』（芦田恵之助）があった。「老先生」が大人や子ども数人に綴り方の方法を語って聞かせるという形式の『綴り方十二ヶ月』を写しながら、「じかに芦田先生にふれているような」気持ちを味わい、文章の見方を学んだのであった。

その考え方と目のつけどころ、ことに中に出ているらつしやいます「大先生」の文章の導き方に、そのころの私はほんとうに導かれながら味わっていたのです。のちに教師になりましたからは、また別



の、教師としての面で、実に学ぶところが多かったと思います。『綴り方十二ヶ月』は、毎晩写しましたが、興奮して思わず立ち上がったこともありました。(1 一二四頁)

当時「書き写す」ことにより本を読むという習慣があった事実は、記憶しておきたい。

大村はまは、昭和三年に昭和女子大学を卒業して、最初の赴任校・長野県諏訪高等女学校へ行ったとき、川島を念頭に置いて、生徒の発言を黒板いっぱい書いていく方法をとっていた(1 一九〇頁)。

2-2 林芙美子が受けた授業——尾道市立高等女学校の先生

林芙美子(一九〇四く五一)は、一九一八(大正七)年四月

尾道市立高等女学校第一学年に入学。一九二二(大正一一)年三月卒業。『風琴と魚の町』『放浪記』を書いた。彼女が女学校時代からずっと思慕していた今井篤三郎の授業風景について、一九四九年卒業の谷田紀重さんは、次のように回想している。

国語と修身の今井先生は私の母の先生でもあり、また林芙美子を教えられた方でした。授業以外のお話がとてもお上手で面白く、私どもがおねだりすると、授業の途中でもお話が始まります。私どもは「お化け」の話が大好きでした。特にラフカディオハーンのもの「耳なし芳一」の話は本で読むよりもずっと面白いと思えました。

(広島県立尾道東高等学校『創立百周年記念誌』 二〇〇九年 広島県立尾道東高等学校浦曙会 八一頁)

当時、少数だが、昔話や新しい小説を話す教師はいた。生徒の多くは購読の教材よりも教師の話に感動し、生涯に亘って記憶していた生徒もいた。

この頃、学校全体に読書熱があり、『出家とその弟子』(倉田百三)、『若きエルテルの悩み』などがよく読まれていた。林芙美子がこの時代に愛読したのは『武蔵野』であった。

2-3 五十嵐力の国語科目標論と高級批評(センテンスメモッド) 五十嵐力は、当時の一定の時間内に定められた内容を講義する、いわゆる「金型授業」を乗り越えるべきであると考へて、大正の半ばから中等学校の国語授業に対する批評活動を始めた。

まず、国語教育とは何か、と問いかける。

続いて、一九一九(大正八)年七月に「国語国文教育の重要な着眼点を論ず」(『修辞学大要』大正十二年七月十日 斯文書院 一頁)において、国語教育の内容と目標を簡潔にまとめている。

第一には、正しい国語国文の何たるかを会得させる事である。

第二には、美しい国語国文の何たるかを会得させる事である。

第三には、作者の思想趣味に関する背景を玩味させる事である。

第四には、(物によつては)時代思潮の背景を玩味させることである。

而して最後には是等のすべてによつて、国語国文を愛重させ、延いては其の国を愛重させる様にする事である。(一頁)

五十嵐力のキーワードは、「正しい国語国文」・「美しい国語国文」・「会得させる」・「作者の思想」であった。それらの玩味・会得を通して、国語教育の目標「国語愛」・「愛国心」を育てることであった。

その指導法としては、語句出典等に関する機械的解釈にとどまることを良しとせず、「作者の趣味、性格、人生観や時代思想の現れた趣」などを研究することであった。大切なのは内面の意義を説明することであり、作者の精神の内奥に立ち入った批評をすることであった。そういう批評を「高級批評」と称して教育現場に求めた。

殊に文学的文章は、文字の底に流れて居る思想を傍目も振らず一気に読み進んで、始めて面白く活かして味はひ得るものであるとして、「分析があつて綜合がなく粒々の注釈があつて、生氣直往、一氣呵成の、命を吹き込む講義がなくては、どうして生きた文章を活かして教へることが出来ませう。」(同前書一〇頁)

と、一気に読み進むことを強調した。

五十嵐力の解釈論は、訓詁注釈にならず「購読」を超えて新しく作者の思想に迫ろうとする生命主義的な方法論であり、部分でなく全体に一気呵成に迫るべきだとする一種の全文法（センテンスメソッド）の提唱であった。それは五十嵐なりの国語教育近代化の提唱であった。又、その目標論は、日露戦争後の国家主義の高揚に棹さず国語愛教育論あり、国家主義思想につながる国語教育論であった。

## 十 国語科における新教育運動

### 1-1 第一回ダルトンプラン学習公開

一九二三（大一一）年一月一九日、熊本第二高女において開催された第一回ダルトンプラン学習公開は、次のようなプログラムで進行した。

#### 朝礼学芸

自作歌朗詠・英詩暗誦、全員合唱「伸びてゆく」

#### 第二限 教室における各学科の学習公開

生徒学習成績物展覧（裁縫・習字、等）

#### 第三・四限

「ダルトン式学習」による生徒の学習成果発表  
物理学習（内田芳子） 国語学習（河野洋子）ほか。

休憩（昼休み）

学校劇 「倅の園」作者 清水かよ子 参加三・四年生約三十名

ロ「甲佐遠行」作者 田代 孝、参加一・二年生約三十名

教師発表 ダルトン式学習と私どもの学校 吉田惟孝校長

国語科とダルトン学習及び作文科指導の経験 妹尾良彦教頭

講読等の実際

米北時三郎教諭

地歴 兼清恭典教諭

数学 河上才次教諭

理科

栗原茂教諭

音楽

高野駒雄教諭

座談会

「ダルトン式学習」に対する質疑・批評会

（熊本第一高等学校編『第一高校百年史』二〇〇四・六 四八・九頁）

この第一回ダルトンプラン学習公開までには、校長吉田惟孝（一八七九～一九四四）の指導と生徒の熱意があった。

熊本第一高女の校長・吉田惟孝は、鹿児島県女子師範学校校長・木下竹次の許で教頭を勤め、木下が奈良高等女子師範学校転出のあとを継いで校長になっていった。一九二〇（大九）年九月に熊本第一高女に迎えられたのであった。翌年九月熊本県から欧米教育事情視察に派遣される。吉田は、およそ十ヶ月にわたる視察の途次、精力的に各国の学校を見学し、イギリスで沢柳政太郎・小西重直と出会い、アメリカでは長田新と知己となり、さらにダルトンスクールを訪ね、パーカスト（一八八七～一九五九）と親しく接した。翌年六月帰国した吉田はダルトンプランの実践に取り組み、『最も新しい自学の試みダルトン式教育の研究』（厚生閣）を出版した。

吉田の女子教育の目標は、「自分でやれることをひとにたよらず、自分で精一ぱいやってゆく」自立人を育てることであった。育てたい能力は、①学習計画力（学習の内容と学習時間を生徒にきめさせる）・②学習の協同化（生徒同士、生徒と教師）、③学習力の獲得であった。

この目標達成のために教師には指導準備の負担を呼びかけている。そして、教師には指導準備の負担を呼びかけている。「少なくとも何十人の生徒の思い思いに調べてくる参考書に一通り目を通しておらねば、彼等の質疑に対して的確な指導を与へ難い」。教える教授は生徒も教師も「ラク」で、学ばせる学習は生徒も教師も難しい。「易を捨て、難を採るのは全く生徒をして自立人たらしめたためである」と。（吉田惟孝「学校の教育について卒業生諸姉の了解を求む」）

（『済美 第一七号』一九三二（大一一）十一月 第一高等女学校校友会 三頁）

### 1-2 国語授業の指導案例

大正十二年十一月、熊本市第一高等女学校でおこなわれた第一回  
ダルトンプラン学習公開における自学自習を促す国語指導案は、次の  
通りであった。

第三学年国語指導案(自一〇月二九日至一一一月二四日)

注意事項(参考書は随意に選択なさい。指導教授は十一月廿八日第一限)

第五課、長谷寺まうで

○随意に研究題目を選んで研究しなさい

(参考研究事項)

○語句の解釈

○この課にはどんなお話がのべられてゐますか

○あなたに一番よく想像された處はどこですか。感想を加へてあげて

御覽なさい。(文章をうつす必要はありません)

○長谷寺についての研究も面白いでせう

○何だか劇的な所がありはしませんか

○西行が妻とあつた様子が変わりやありませんか

○一人はどんな境遇におかれて居たのでせうか

第四学年 第二六課 長良堤の訣別 (四時間)

\*問題中、△印は余裕あるものへ。□印は更に余裕あるものへ。

1、字句解釈。南山不落。社稷。市ノ丞。棟梁。いしくも。嫌疑。

杞 憂。合戦の駆引。守護するときんば。お舟人。くだけかけ。式

退。鉄扇。

(其の他自由に)

2、浄瑠璃の所だけは、一項毎に抜いて解釈せよ。

3、此の劇の時代、人物、場所を簡単に書き分けよ。

(但し人物は、主なるもの副なるもの其他の区別を明かにせよ)

4、本課全体の筋を簡略に記せ。

5、本文の形式、内容上面白い箇所をあげよ。

6、本文の主要人物の境遇を述べよ。

△7、この劇の無台装置を絵で表はせ。

△8、各人物の所作をもつと委しく想像して記載せよ。

9、「こなし」「思入れ」の様子をも想像せよ。

□10、全体における劇的变化について、批判を述べよ

□11 坪内逍遙著「桐一葉」を読め。(ダルトン式学習の実施状況一 班 『若

草 第一八号』一九二二年十一月十七日 高等女学校校友会 一四頁)

\* 基本的な学習課題は全員に学ばせている。

\* 進度に応じて学習内容を選ばせている。学習内容の自由化

である。

\* 7、8などは、表現方法を多様化し、創造力を育てようとしてい

る。

\* 11は、読書への発展を期待している。

\* 研究課題を選ばせている。

\* 文学の読み方を獲得させる手引きをしている。

1-12 ダルトンプランによる学習者の記憶

○生徒の受け止め方は、自主性が生かされることよって好意的であ  
り積極的であった。ダルトンプランによる学習指導は、①学校の全ての  
活動・②各教科における学習指導・③各教科の学習のうち各二時間の  
「ダルトンの時間」の学習指導を意味していたが、③の意味で記憶して  
いる生徒も居た。次に昭和四四年ぶり開かれた会合で話された卒業生  
の記憶と感想を抄出しておく。

○ 村上 ダルトンの授業は週二回ありました。数学、国語、理科、  
地理、歴史の五課目で他の学課は普通形式の授業です。自分で数学  
なら数学の学習計画を立て、それに従ってやります。甲組が一年  
から四年迄月曜木曜。乙組が火曜金曜。丙組が水曜土曜となってい  
てダルトンの日はどの学課をやってもいいのです。週一度の指導  
授業で学習のまとめをやり次週は先にすすみます。その学習結果  
は全部ノートにまとめて先生に出します。

緒方 学習帳を出して先生に見て頂くのですが先生方も一生懸命でよく見て下さるし、私共はそのイートが真赤になるほど批評その他書き込んで頂くのがはげみにもなり又自慢でした。

亀田各官に進度表九二ふものを持ち、又級全体の進度表は教室の後の方に張ってあって、各自勉強の進み工合を毎週書き込んでいきグラフの伸びるのがたのしみでした。学校の門限は四時迄でしたがダルトンの時間には一時間、二時間と限らずに学習が進むまゝにずっとつづけてやりました。

村上 退出鐘が鳴っても机にへばりついてなかなか帰ろうとしないで週番におこられ、当直の先生かまわって来て追い出したりなさって大変でした。学習意欲に燃えてこの始末です。

倉田 丁度今の英才教育法とも云えると思います。  
先生と生徒のふれ合いも深く心おきなく質問も出来、あらゆる対象機会を学習の場と考える様云われ職員室でも廊下でも、又沢山の参観者がありました。がその方々にも質問してよいと云われました。

…中略…

倉田 私は三年の二学期から卒業迄この教育を受けましたが、やはり小説を書いたり劇をやったりした事が一番印象に残っています。そして又自分の能力に対するいゝ意味での自信ももつ事が出来ました。

緒方 私はこの教育を受けて、物の考え方についても仕事の面でも納得のいく迄追求して徹底させる事を生活の基調として持つて来たところに大きい意義を見出しています。吉田校長は飾り気のないさっぱりしたお人柄で親しみ易い慈父の様な方でした。

思い出としては学校劇のことがあります。学校生活から取材した創作に作詞作曲をし、自由な振付をしたダンスや背景の製作も皆我々の手でやりました。学校劇は総合学習として公会堂での県下連合音楽会や、ダルトンの公開研究発表会の時、又

学校内では音楽会の時などに発表の機会はいくつもありました。

大正十二年私が三年の時「若き蛾」という劇を自作自演しました。内容は灯火に集る蛾が吾が身を焼かれてもなほ、求める様に私達は学ぶ事に若い命をかけても真理を探求したいというもの。

尾崎 この様に素質才能を持った人は自分の勉強したい方面に力を伸ばす事が出来ました。倉田さんは今も詩短歌の分野で活躍していらつしやいます。(座談会 ダルトンプランの授業で学んで「清香会百年史」二〇〇五年二月 熊本県立第一高等学校清香会九五頁)

## 2-1 吉田惟孝の読書指導論

大正十二年一月一日 『九州日日新聞』に「教育の資料としての小説」と題する論説を寄せている。

「文芸も哲学も人生に即したものである。人生の体験から生まれた真剣なものである。」と前置きして文学教育論を展開していく。

◇ 文芸は哲学に比べて具体的表現に傾いているが故に、平易に人生を解し、味わうことが出来る。このために文芸は哲学よりも民衆に入りやすい。特に感情の若芽が一時に萌え出で、鳥歌ひ花笑うように、森羅万象を眺める傾きの強い青年に、読者が多い。読むなど禁ずれば尚ほ読みたがり、黙って居れば読みふける小説を、何が故に教育の資料にしないのであらうか。

◇ 方法としては、まず教科書を生かすことを勧めている。今日の国文教科書中には、現代文の可なり多いものがある。このような教科書を用いるか、或は適切な補充材料を使って、人生に即した全人生活のドンドン底から生まれた小説を観る眼を養ってゆく。「現代小説の特質傾向を知らしめ批判せしめて、漸時に眼を引き上げてゆきたい。文を味はうことによつて作者の人格——それは其の作を物したときの真摯な態度、真剣な生——に接触せしめたい。」こうすることによつて知らず知らずのうちに人格を培養し、文を読む眼、つまり読書眼がたかまっ

ていく。読書眼高まるとくだらぬ戯文を読むことを恥じるようになる。◇小説をわけもなくたゞ恐ろしいものとして蓋を堅くしめて置くのではなく蓋を撤去して教師指導の下に真相を調べさせる。そして吉田は、「真偽、善悪、美醜の識別力、鑑賞眼を養ふてゆくのが真に親切な青年教育と信じて居る。」と言い、「なぜ教師指導の下に読む眼を養わないのであるか。」という言葉で締めくくっている。(一一、一二、五)

当時、学校教師の多くは、生徒が小説を読むことに反対するか消極的であった。吉田真善美の識別力を育てるためにも小説を読ませるべきであると主張し、小説を読む力を育てる資料でもありと提起している。

## 2-2 吉田惟孝の配転とその後のダルトンプラン

一九二四(大正一三)年三月、文部省督学官森岡常蔵が熊本第一高女の視察に訪れ、教科書を使って講義しない授業を非難した。

一九二四(大正一三)年一九二四(大正一三)年四月二十九日、ダルトンプランの創設者レン・パークラスト女史が来校し、第一高女の講堂で講演「ダルトン式教育案に就いて」講演した。女史は、成城学園と毎日新聞社の招きで来日していた。

同年十一月十五日、第二回ダルトンプラン学習公開がおこなわれた。参加者は九州各県その他より、三〇〇余人であった。

一九二五(大正四)年になると文部省は「自由教育の行き過ぎ」として新教育批判を強め、熊本県では、九州新聞・九州に日日新聞が第一高女の授業の論評を始めた。吉田惟孝校長も記事を寄せている。ダルトンプラン式授業については「生徒への負担過重、知識の不確実」など不安の声が大きくなっていった。

同年四月、第一高等女学校校長吉田惟孝は新設の小樽長橋中学校長に補せられ、第一高女のダルトン式学習は終息した。『第一高等女学校百年史』は、「授業形態は全て元の学級単位の学習にもどり、生徒の自主的な学習は根こそぎなくなった。」(五三頁)と記している。

## 十一 大正後期の表現学習

### 1-1 人間の教養としての文章表現力

五十嵐力・佐々政一・金子彦二郎は、青少年に向かって近代社会における文章力の効用を説き、明治期の範文模倣を越える近代的な文章表現論を展開し、実践をとおして自己表現の作文教育論を確立した。五十嵐らの文章表現論と作文教育実践は、明治期における福沢諭吉の『学問のすすめ』に対する、いわば大正期の『作文のすすめ』であった。

大正期作文教育は、生活の中から題材を選んでありのままに表現する写実の探求であり、発想・着想、構成、推敲(語彙語句)の具体的な指導がなされた。

人間を規制する「市民」・「国民」という概念(パラダイム)はいまだ存在せず、人類のために生きる人間の教養としての文章表現力の育成をめざしていた。それは、大正期に生きた教師の視野の大きさ・自由さを示すものであった。

### 2-1 少女の感傷の表現

一九一八(大正七)年四月に、林芙美子は尾道高女小学校に入学した。国語の森要人先生が担任であった。当時、国語の週一時間は「作文」であった。森はさくぶ作文の時間にはぼんやりと窓外に目をやる風であったが、生徒の作文にきちんと朱れて返し、優れた作文はみんなの前で読んだ。その中で芙美子の作文は目立っていた。暮らして余裕がなかった芙美子の面倒をよく見てやっていたと伝えられている。

次に紹介する芙美子の一年生「仏通寺日記」が校友会誌『真たま』(六号)に載せられた。事情があつて三歳遅れの入学なので十五歳の作文。この年度の「競点作文(コンクール)」では一位となった。

仏通寺旅行記

林フミ子（女学校一年）

あかね色に染まった夕ばえの空は刻々に薄れて行く。冷たい師走の風はようしゃなく吹いて旅の空の淋しさがひしひしとせまる。

ここは本郷町の小さい停車場、我々は冷たいベンチに腰を下ろして友の帰りを待つのである。仏通寺への旅行を終えた私等棒の様な足を引きずってようやくこの駅へ辿りついたのである。まだ二時間も間があるので十六人の足の強い方は先生と小早川の墓へ詣でられた。見る物もない田舎駅に二時間も待つのは身ぶるいする程寒い。

時間は段々とたつて、どこからか夕暮の寂しい鐘の音が流れる。

夜のとばりは全く下りて紺青の澄んだ空には金銀の様な星がキラキラとまたたいて鎌の様な月がすごい程青く満地を照らして蓮池にとりどろとうつつている。八十人余りの残った人は今か今かと十六人の方の帰りを待つ。火の気のない駅のベンチに腰かけていると、野面を吹いた風が肌にしむ。駅前小さい宿屋には灯がついた。時間は進む。友の影は見えぬ。大勢で田の方へ出て見ると、夕方帰った道が田圃の中にうねっている。薄闇にすかして見ると、豆の様にぼつちりと小さな灯影が向うにゆらいで見える。私はもう何となく涙ぐまれて、そぞろに淡い哀愁を感じる。旅の空の悲しさがひしひしとせまって、長い漂泊の夢より目覚めた如く、尾道の空をなつかしく思うのである。

「嬉しっ」誰かの声に驚いて見れば、軽い旅のやつれをしたお顔をしてみれば、五人帰られた。先生にお目にかかった時は丁度乳にうえたみどり子が、慈母に会える如くどんなに心丈夫に思ったことだろう。ああ今日は思い出深い旅行だった。私の心の底には忘れえぬ何等かの意味ある印象をあたえたのである。銀砂子を散りばめた様な星が神秘的な光をさして高い空に、丁度極地の人を待っている一種特有の、青いうるみのある瞳の様な色をしてキラキラとかがやいている。

（「林芙美子」『平林たい子全集 ⑩』一九七九年五月）

無駄のない文章である。秋の夕暮れの淋しい情景と人待つ心の揺れを多角的に描いている。これまでに身につけた日常語を使って哀愁の空を冷静に描いている。冷静な目は大人の目を感じさせる。あかね色の空が次第に黒い闇に変わっていく。駅前の宿屋に灯が点り人の声が生気呼び戻す。少女の「感傷」が巧みな言葉遣いでみがきあげられている。芥川龍之介の「トロッコ」をおもわせる味わい深い作品になっている。

3-1 青年の煩悶と表現——太宰治とシヨウキチ生

1-1 太宰治『思ひ出』における「創作」への目覚め

私が三年生になつて、春のあるあさ、登校の道すがら朱で染めたまるい欄干へもたれかかつて、私はしばらくぼんやりした。橋の下には隅田川に似た広い川がゆるゆると流れてゐた。全くぼんやりしてゐる経験など、それまでの私にはなかつたのである。うしろで誰か見てゐるやうな気がして、私はいつでも何かの態度をつくつてゐたのである。私のいちいちのこまかい仕草にも、彼は当惑して掌を眺めた、彼は耳の裏を掻きながら呟いた、などと傍から傍から説明句をつけてゐたのであるから、私にとって、ふと、とか、われしらず、とかいふ動作はあり得なかつたのである。橋の上での放心から覚めたのち、私は寂しさにわくわくした。そんな気持ちのときには、私もまた、自分の来しかた行末を考へた。橋ををたかた渡りながら、いろんな事を思ひ出し、また夢想した。そして、おしまひに溜息ついてかう考へた。えらくなれるかしら。その前後から、私はこころのあせりをはじめてゐたのである。私は、すべてに就いて満足し切れなかつたから、いつも空虚なあがきをしてゐた。私には十重二十重の仮面がへばりついてゐたので、どれがどんなに悲しいのか、見極めをつけることができなかつたのである。そしてたうとう私は或るわびしいはげ口を見つけたのだ。創作であつた。（『太宰治全集1』一九五九年十二月 筑摩書房）

これは小説の一部であるから全てが事実であったとは言えないであろう。とはいえ太宰の第一作品集である『晩年』のなかでは比較的虚構性の少ない作品である。作中の青森中学校の三年生が隅田川を見ていたとは言えないかもしれない。しかし「うしろで誰か見てゐるやうな気」がしたという表現の真実性は疑えない。その「真実」に掛けて、ここでは歴史の資料として扱う。大正八年の春「すべてに就いて満足し切れなかったから、いつも空虚なあがきをしてゐた」中学三年生がいた。

静岡中学校『校友会雑誌』は、「生徒が率直に生の悩みにふれたのは二〇号（大正七年刊）あたりが最初であった。」と書いている。その後、生徒は「生の不安」や「社会の矛盾と自分の迷い」について書き続けた。二八号（昭和二年）には、ペンネームのシヨウキチ生が次のように書いている。

……八張り歎きのあるのは——私がそれをどうする事も出来ぬのは自分には分らない。オゝ悲しみが——寂しさが、此のこの胸をギョツと締め付ける。それをチツとこらへて居ればそれだけ掻き取りたい感情に——丁度あのモヒ中毒者の様に、あの夢遊病者の様に——俺はそれを抱き締めようと腕き苦しむのだ。丁度水草を追うて何処までも。さ迷ふ遊牧者の様に。私は淋しい。然し私はどうしていゝやら。唯悲哀のどん底に見にくい自分を見出した時初めて心が慰む。さうして急に明るい世界に飛び出したくなる。俺には何故かわがらぬ。（『静岡静高百年史 上巻』一九七八年十月 静岡高等学校同窓会 六八二頁）

中学五年生（新制高校二年生）らしい、やや情感傷に溺れた誇張表現ではあるが「然し私はどうしていゝやら。」という感情表現は真実であろう。中学生太宰治と共通している。違いは、太宰がはげ口を「創作」に見出しているのに対してシヨウキチ生は出口が見出せないでいるこ

とである。

しかし、出口が見出せない「寂しさを」このように表現し認識しているところに当時の静岡中学校生の認識の深さと真剣な思考を見るべきであろう。

コラム 自立

ここに掲げるのは、佐賀県立鹿島中学校の校歌である。当時同校の校長をしていた下村湖人が一九二二（大正一〇）年に作詞した。

一、有明の海多良ヶ嶽 薄紫に包まれて  
夢見る如き彼方より 糺深く昇り来る  
大日輪の尊さよ

五、心胆天の矢の如く 踵は固く坤球を  
一足ごとに踏みしめて 行くはわが道人の道  
世界の道ぞもるともに

六、わが魂の光こそ わが行く方の道しるべ  
さらばわが手をあげて 自立の歌を高らかに  
弥生の空に響かせん （三・四節、省略）

下村校長は常々「考えよ」「自分の魂を見つめよ」と講話していた。第五節に下村の個人主義思想を知ることができる。

下村湖人は、小説『次郎物語』を一九三六年から一九五三年まで書き継いだ。その中には 軍国主義に反対する朝倉先生（作中人物）が学校を追われる事件があり、それを阻止しようとする次郎もまた退学させられる。

（佐賀県立鹿島高等学校記念誌『星霜』一九九六年五五〜五七頁）

2

コラム カンガエテイルトオリヲカク作文

峰地光重（一八九〇〜一九六八）は、鳥取県高麗小学校校長・訓導であった大正七（一九一八）年に綴り方の公開授業をおこなった。小学校五年の教科書の「水兵の母」には、「母は如何にも残念に思ひ候。何の為にいくさには御出でなされ候ぞ。一命をすてて君国に報ゆる為には候はずや」と書かれていた。

峯地は綴方の授業を公開してみせた。  
一人の子どもがシベリヤに兵隊として送られる叔父さんのことを書いていた、それを取り上げたのである。

「みんなで水車のところまで叔父さんを送っていった。もうここで別れましようといって、誰もが涙を流して泣いた」  
それが結びになった作文であった。

これをめぐって子どもたちの意見が取りかわされた。「こんな時は、うれしく勇ましくするものだから、涙をこぼしたと書くことはいけない」という意見があった。この部分は「勇ましく活動写真のように出て行きなさいました」と書いた方がよいという意見もあった。

大正デモクラシーの風潮とはいっても、国家主義・軍国主義の基本はいささかも動いていなかった。そこで「カンガエテイルトオリヲカク」という綴方は、容易ならざる場面に立たざるを得ないのである。

県視学や教育会長などの参観しているところで「悲しかったことを悲しいと書くのは立派な文章の書き方だ。もつと悲しかったらもつと悲しいと書いてもよい」と峯地光重は言い放った。

（篠村正治『鳥取教育百年史余話 中』一九八〇年十月 学苑社）



#### 4 調べ学習の展開

大正の半ば頃から全国の高等女学校では「調査研究」がおこなわれていた。生徒は、主題追究の知的な喜びを感じ、協同学習の楽しさとしんどさを体感しながら夢中になって取り組んでいった。その過程で共同思考の方法（比較・分類・関係づけ・総合）を身につけていった。ここでは、大阪府立泉南高等女学校と私立自由学園の実践を取り上げる。

##### 4-1 大阪府立泉南高等女学校の調べ学習

『衣服展覧会記事 岸乃姫松 特別号』

大阪府立泉南高等女学校は、大正七（一九一八）年一〇月三十日に創立記念式をおこない、三日間、衣服展覧会をおこなった。それは「未だ嘗て企てた事のない」大きな展覧会であった。一年後に出版された『衣服展覧会記事 岸乃姫松 特別号』（水谷ツル編 同校校友会 大正八年十一月発行）は、その詳細な記録であった。

校長は、展覧会を開く理由（目的）を三点上げている。

- 一、本校は従来運動の方面に努力してきたが、体育に次いで精神的方面、特に知力の向上に努力してきた。その努力を保護者や卒業生に知ってもらいたいこと
- 二、衣服について、時間的、空間的、精神的方面から考えることを通して智育の一端に資したいこと
- 三、衣服について広く知ることによって衣生活改善に役立てること

本号の「目次」によると、記事の内容は次の七項目である。

- 一、古代衣服室
- 二、現代衣服室
- 三、手芸室
- 四、地理博物室

##### 五、大阪府立商品陳列所出張陳列室

##### 六、理化家事室

##### 七、文学室

本号全二三三頁のうち「七、文学室」に一一〇頁が当てられており、約半分を占めている。その内容は、次の通り、衣服に関する総合的な調査報告となっている。

- 1、説明（展覧会中の「七、文学室」展示の概要を説明）
- 2、語釈 一、「衣服」の類語 二、「服装」の類語
- 三、「きる」の類語 四、衣服各部の名称
- 五、紡織に関する名称 六、裁縫用具の名称
- 七、製作に関する語 八、衣服材料の名称
- 九、衣服類の名称 一〇、色彩の名称
- 一、祝詞式
- 二、古事に現はれたる衣服 一、祝詞式
- 三、源氏物語に現はれたる衣服の名称
- 四、枕草子より
- 五、謡曲二百番中より
- 4、色と文学
- 5、衣色と植物
- 6、色と吉凶
- 一、色は凶
- 二、赤色は吉
- 三、白は、吉にも凶にも厳肅なるべき時に
- 四、青は、晴々しき時に、既知の方か
- 五、柿色は
- 7、人称と五色
- 8、衣服の名称と文学的連想
- 9、衣服の名称家族合わせ

- 10、辞書と衣服名の数
- 11、衣服名称の異名
- 12、衣服に関する名称と大阪付近の方言訛語
- 13、衣服に関する隠語
- 14、衣服の名称と漢字
- 15、まさすけ（雅亮）装束抄
- 16、小学校より女学校の今日までに学び得たる衣服に関する文字と言葉（生徒）
- 17、衣服の名称と外来語
- 18、袖の文学 附 帯、前垂のこと
- 19、虚栄と質実
  - 一、王様の新しい衣装
  - 二、眞田昌幸の節儉
- 20、家紋
- 21、紋章と文学
- 22、衣服の和歌
- 23、衣服の俳句
- 24、衣服の俚諺
- 25、衣服に関する漢語
- 26、衣服に関する論文（七編）
- 27、衣服に関する生徒作文
- 28、衣服に関する書目一斑 \*項目番号は、引用者が仮りに付した。

「10、辞書と衣服名の数」では、担当班が四種の辞書に当たって「衣服に関する語」を数えている。結果は、次の通りであった。

和名類聚抄	合計八十四
和爾雅	合計百九十二
言海	合計六百余
辞林	合計六百五十余

結果は味気ない数値に過ぎないが、辞書の各語に当たって「衣服に関する語」として認定するのは極めて困難な作業であったであろう。意味の解釈、類義語との弁別、衣服の意味の境界領域の線引き、などの検討と班員の共通理解は容易ではなかったと想像される。このような困難な作業を乗り越えて為された班員の努力は感動的である。指導者は、その間の事情を次のように述べている。

衣服類の名称を調べるに就いて二十幾種かの字書類を渉猟しました。生徒にも夏休以来「衣服の名称」に氣を付けて調べさせもし、だんだんに覚えて置くやうにと言海と辞林を幾度引かせたか知れませんが、調べる度に辞書へ印を付けさせておきました（これは後来辞書中衣服の名に出合す度展覧会の事を思ひ起させる爲と苟しくもこの兩辞書中にある名詞は悉く記憶するに便する爲めとによります）

時代が進歩するに従つて言語の数も多くなりますが衣服類の名称の如きは複合名詞が多いから固有のものとはさう無暗に増すものではない。唯辞書といふものが完全して来た為めに新しい辞書は古い辞書に較べて餘程深山な語數を集めてあるといふ事を實數の上を知る爲めに右の數を調べ出したのです。言海や辞林は全く生徒に一任してやらせましたから或は數の誤りがあるかも知れず、又部類別の辞書ではありませんから「衣服に関するもの」を取捨する上にはつきりした標準を立てる事が出来ないといふ條件も承知して見て戴きたい。

この數を出すことによつて三年生の生徒がどれだけ「衣服に関する名詞」に就いて苦勞してゐるか又知識を増してゐるかは、展覧会に出陳されたものに就いて読めないものを質問せよと言つても二三格段な語（辞書にないもの）の外問ふ必要のなかつた事によつても分ります。數そのものよりもこれを出すまで

の生徒の努力を傳へる爲めに此説明を附けて載せる事にしました。  
（同誌、一五六頁）

辞書を何度も読み通すという苦勞を要請した指導者の意図と、それを成し遂げるプロセスにおける生徒の努力と知識習得について述べている。

「衣服に関する語の数」調べは、辞書についての認識を新たにし、人間の生活における「衣服」意義についての考えを深めたことである。

「4、色と文学」では、「言海」の「いろ」についての記述を引用した後、「色」の意味の多様な広がりについて説明し、『古事記』の大穴牟遲命の話を引用している。

一体吾々が事物に就いて区別をするのに先づ眼の方からは形ど共に必ず「色」に依ります。犬を見ても大小等の形よりは白とか黒とかの色目の方がからりと印象に残る事が多い。初対面の人に対してはくち口に出して言ふと言はざるとの違ひだけで其の人の顔色は身長や肥瘦と同時に必ず意識に上るものです。それで苟しくも眼の見える者を取つては宇宙の森羅万象に対する観念中「色彩」といふものほど大なる関係のものはありません。故に前にかかげたやうに「色」といふ語が多種のものを表はす複雑な意味を含んだ語となり、つひには多くのものをいふに「色々」といふ詞さへ用ふるやうになつたのであります。

日本文学の色彩にこだわった表現の初出は『古事記』神代の巻の大穴牟遲命が「黒い色や青い色は嫌い、赤い衣が良い」と言つた場面であるとして展示している。

鳥羽玉の 黒き御衣 真具さに 取り装ひ

奥津鳥 胸見る時 袖揚も 此れは不宜

辺津浪、 磯に脱ぎ棄て 翠鳥の青き御衣を

真具さに 取り装ひ 奥津鳥 胸見る時

袖揚も 此も不適 辺津浪、 磯に脱ぎ棄て

山県に 来ぎし瀬茜搗き染木が汁に 染め衣

真具さに 取り装ひ 奥津鳥 胸見る時

袖揚も 此し宜し いと子やの 妹の命

群鳥の 吾が群れ往なば 引け鳥の 吾が引けいなば

泣かじとは汝は言ふとも 山処の 一本薄

頂傾し 汝が泣かさまく朝雨の さ霧に起たむぞ

若草の 妻の命 ことのかたりごとくも こをば。

「9、衣服の名称家族合わせ

衣服の名称を家族関係に見立てて組み合わせ、「小話」にしている。

夫婦

○大袖と小袖 大袖は装束の上に着て交際社会に活動するうち懸け にいふ名なれば夫の位置なり。小袖は常に小さくなって家の中に用を足す妻に比すべく、大小の名と用法とより見て名実相適へる理想の夫婦と謂いつべし。

○上着とぎ下着 上着の恰好は下着の着け様に關係すること大なり。仲よくせざれば服装の整はざるなり。

夫婦の關係ありと云ふ所以。

一族中出世したるもの

○褌(袴) 下帯より礼装まで。

○直垂 寝衣より盛装まで。

○狩衣 もと狩にばかり出てきたるものが昇殿するやうにな

りたるなり。

○風名敷 風呂場にて着物を包む爲めのものが次第に出世して進物を包んで御座敷へ罷り出るまでの大出世なり。

声ばかりの出世

○湯文字 (湯巻き)

○帯文字 (帯)

○髪文字 (髪)

右の如く文字の附きたる語を衣服外に求むればす

もじ(鮪) しゃもじ(杓子) そもじ(汝) 等幾らもあるべし。何れも発音ばかり優雅になりたるものにて實際のものは其の用途に何の変化もなきなり。一族

中最も床しい名は

○糸である、神代の歌にも「うまひちはうまひとどちや、いとこはもいとどち」とあつて同輩和親の状を表はす語として用ひられて居る、源氏には「いと宮」とか「いと姫」とか云ふ語のあることや従兄弟をいこと云ふ意味や関西でお嬢さんをいとさんと云ふことは別の所でも述べて置いた通りである。誠に名の響の優しいのみでなく、離ればなれに裁たれた布帛を継ぎ合せて着物にする重大なる役目は一筋の糸其のものに依つて果たされるのである。

単語を擬人化して「語と語との関係」を小話にしている。二つの語を強引な論理で関係づけて楽しんでいる。語源説や派生語については異説

もあろうがそのことにこだわらずに関係づけるユーモラスな遊びである。創造力と創造力を花開かせる遊びであると言えよう。学校という正しい知識と真面目を尊重する場に「うそ」を持ち込む大胆さに注目したい。

16、小学校より女学校の今日までに学び得たる衣服に関する文字と言葉 次の4項目に分けて調査している。

文字 一、小学校 二、女学校

言葉 一、小学校 二、女学校

ここでは、文字 一、小学校及び言葉 二、女学校を再録する。

文字 一、小学校

糸の部 糸細紙終織絹總縁綿組給繪紋練紅紺縞維絶網

綱續線縦経紡級紫繁縫績縮編繕納繼素結絲紳系紐紹約統

衣の部 衣複袖表裂補裏衰

雑の部 襪布帶丈尺寸呎冠胸幅麻靴錦染繭

言葉 二、女学校(裁縫教科書中より)

ようふく(洋服) だいもん(大紋) ぢんがさ(陣笠)

たもとまる(袂丸) さんまいがさね(三枚重ね)

かけゑり(掛袷) たてづま(立てづま) はんてん(半天)

せいこうおり(精好織) ちゆうやおび(晝夜帯)

かのこしぼり(鹿の子絞り) びろうど(天鷲絨)

げんろくそで(元禄袖) むぢもめん(無地木綿)

ちりめん(縮緬) うらうちろ(裏打組) カツパ(合羽)

はかたおび(博多帯) しゆすおび(縹子帯) など

(本科三年生 瀧谷澄子 野中良子 調) 一六三二頁

\* 本文では、計七七語を記載している。ここでは、その中の一九語を再録した。

一九一八(大正七)年から翌年にかけておこなわれた展示と記録の活動は、大がかりな協同学習であった。

衣服展覧会は、裁縫教育の観点からおこなわれたようであるが、「裁縫科」の教育にとどまらず「歴史教育」であり「国語科教育」でもあった。生活教育をめざした「調べる学習」であった。当時の教科別のカリキュラム体制では異色の一大総合学習であった、と言えよう。

国語科教育の観点から見れば語彙・語句の指導であり、言葉を通しての生活認識の場であり、課題設定から調査活動及び展示活動まで「話しあう力」が育つ場となっている。

## 2-1-2 自由学園の調べ学習

一九二一（大正一〇）年雜司ヶ谷に、自由学園は、羽仁もと子（一八七三〜一九四二）・吉一夫妻によつてに創設された。その目的は、諸学科の実際的な能力を育てることと「めいめいに自分の生（いのち）のよき経営」力を育てることであった。

三回生の二人がが卒業に当たり「結束して何かをしたい」と考えて羽仁もと子に相談すると、ミセス羽仁が「学園の所在地である高田町の調査を」という示唆を出してくれた。それを受け止めて取り組んだ三回生はだんだんに熱心になっていった。そのねらいと活動は次のように報告されている。

これから私共が社会事業をするにしても、何の仕事をするにしても、先ずめいめいの住んでいる町村の状態を明らかにすることから始めなければならぬ、近き将来に於いて必ず与えられなくてはならない女子の参政権も、私たちがめいめい住む町村の事情に通じ、その幸福と改善を希う心の深くあることによつて、はじめて十分に行使されることが出来るものであるし、またそれが少しでも高田町の進歩のために益する所があつたなら幸いだと思ひ、だんだん皆が熱心になつて来ました。

指導者は、同じ高田町に住んでおられる安部磯雄先生にお願いしました。

私共はまずこの高田町にどれだけの貧しい人々が住んでいて、その生活の状態はどういう風であるかを調べました。

その次に、高田町全体を戸別に訪問して、その職業、家族人数などについて調べ、塵芥その他の始末、そのために支払われる金額などを調査しました。

それは近き将来に於いてまず清潔な衛生的な高田町を現出するために、何か手がかりになるような材料を得たいと思つたからで、職業を調べたのは、我々の住んでいる高田町の日々の活動の状態が最も多くそれによつて察せられるであろうと考えられるからでした。

一度行つて留守であつた所には、二度も三度も行きました。小さい路地などの多いあたりは、三度も四度も歩き直してみたりしました。それでも留守であつた少数の家もあり、見落した所も多少あるようでございます。しかし統計は調査することの出来たカードのみで作りましたから、かなり確かなものでございます。

統計は、二階堂保則先生の懇ろなど指導によつて作りしました。その後、同学園では全校一六七名の生徒による第二回目の高田町全町の戸別調査をおこない、報告書『我が住む町』（約百ページ）を作成した。

高田町全体を戸別訪問した調査の内容は、職業・家族人数・塵芥処理などに支払われる金額などである。留守の家には何度も訪問してカードを取つている。社会調査の方法は安部磯雄（一八六五〜一九四九）の指導を受けた。報告書には高田町に住む人々の酒屋・運送店などの職業統計がグラフにして示され、次のような解説が付されている。

店というのは大概日用品の小売店で、近所の人々が相手であるとするれば誰でも小売商であることに気がつく。そして中でも一番多いのは菓子屋であつた。駄菓子屋も加えらると一四四軒ある。食物物でもないこの菓子屋が、こんなに多いのを見ても、時を定めずお茶を飲み、お菓子を食へ、来客には同じようにお菓子をすすめることのおおい、とかく無駄食いに時と金を費やしている我々の生活が省みられる。戸数から

割出してみると、約三三軒の家で一軒の菓子屋を支えていることになる。一つには震災のために市中から移って来た人たちが、割合にとりつきやすいと聞いているこの菓子屋をはじめ、自然供給過多の現象を示しているのでもあろうけれど、三三軒ばかりのお得意で一つの店を支えて行かなくてはならぬことになる、品物は高くなるわけである。(5 羽仁もと子『自由学園』の創立『婦人の友』一九二二年二月初出。本文は、『自由学園の歴史』自由学園女子部卒業生会 編 発行による。(二五〇頁) 調査のデータに基づいて社会生活を見つめる確かな認識と表現力が育っていた。

## 十二 私立女学校の国語教育

○ 一九一三(大正二)年に八万人だった高等女学校生徒数は、一九二八(昭和三)には三六万人近くにまで達していた。日本の経済成長に伴って大正半ばから女学校も多様化し、文化学院・自由学園など、いわゆる新教育の実践を目ざす学校が生まれた。

ここでは大正後半に創設された私立女学校の事例として文化学院と自由学園を取り上げる。

### 1 与謝野晶子と文芸教育

文化学院は、画家・建築家の西村伊作を校長とし、歌人の与謝野晶子と画家の石井柏亭を副校長格として、一九二二(大正一〇)年四月に駿河台に開設された。西村伊作は、「高価なものよりも美しいものを」と標榜し、芸術による人間教育を目ざしていた。

男女平等の思想 与謝野晶子(一八七八〜一九四二)は、「功利的な打算を超えた」「芸術家的な愛」に生きる新しい文化生活を創造し、そのことよって人類に寄与する夢を実現しようとした。

私たちの学校の教育目的は、画一的に他から強要されることなしに、個人個人の

というめいしようにつつつ創造能力を本人の長所と希望とに従って、個別的に、みずから自由に發揮せしめる所にあります。これまでの教育は功利生活に偏していましたが私たちは、功利生活以上の標準によって教育したいと思えます。即ち貨幣や職業の奴隷とならずに、自己が自己の主人となり、自己に適した活動に由って、少しでも新しい文化生活を人類の間に創造し寄与することの忍苦と享樂とに生きる人間を作りたいと思えます。

言い換れば、完全な個人を作ることが唯一の目的です。(与謝野晶子「文化学院の設立について」『太陽』一九二二年一月初出。本稿は、岩波文庫『与謝野晶子評論集』による。

与謝野晶子は、男女平等の社会を理想としていた。その観点にたつて、男女共学の中等学校を作った。それは先進的な思想の具体化であった。

これまでの良妻賢母主義の教育は、人間を殺して女性を誇大視し、男子の隷属者たるに適するように、わざと低能者扱いの教育を施して来ました。私たちは男子と同等に思想し、同等に活動し得る女子を作る必要から、女性としての省慮をその正当な程度にまで引き下げ、大概の事は人間として考える自主独立の意識を自覚せしめようと思えます。これが私たちの学校で、従来の高等女学校の課程に依らずに、特に中学部女生徒と呼ぶ所以です。(同前書 一七九頁) 科目編成は芸術を主としていた。中学部は四年制で、週三五時間のカリキュラムは、一三学年を略記すると下表の通りであった。

(平子恭子著『与謝野晶子の教育思想研究』 一九九〇年一〇月 桜楓社 三八一頁)

文学の時間を多くし、数学の時間を少なくしていることである。

教員には、与謝野寛・晶子、菊池寛、佐藤春夫、川端康成などの芸術家や若手学者が当たった。「精神講座」には吉野作造、寺田寅彦、有島武郎、和辻哲郎、北原白秋などが招かれていた。

德育を、従来の公立学校のように「修身」とせず、「精神講座」にしていることに注目したい。

学科 学年	精神講座		数学	人文科学	日本文学	自然科学	外国文学		美術・音楽及び舞踊、手芸（一から三） 省略
	倫理、労働及び 現代的常識	二					英語 英語會話 名著講読	英語 英語會話 名著講読	
第一学年	算術 代数	三	日本地理 日本歴史	三	国語 名著講 讀 文学概論 作文作歌	博物	英語 英語會話 名著講読	英語 英語會話 名著講読	二
第三学年	同上	二	外国地理 西洋史	四	名著講読 文学史 文学 概論 作文作歌	物理 化学	英語 英語會話 名著講読 外国文学史	英語 英語會話 名著講読	三

晶子は、名著講読と作文作歌を担当した。作歌指導は、「結び字」(題

詠」と「自由詠」を中心に行い、「結び字」では、晶子が「明・行・青」等の文字を板書し、その文字を詠み込んだ歌を作らせた。次の週に良い作品を謄写版で印刷して、批評し添削した。その間に「歌の詠み方」について語ることもあった。(平子恭子 三八〇・三八一頁)

晶子の添削の態度は、「或人には高度な指導を以て急激な開眼飛躍を期待し、或人には詳密な評語を添えて参考とし、或人には一二語の添削で感じ方若しくは表現の仕方を暗示する」という学習者の実力に応じてなされるものであった。それはある人には寛大に見え、ある人には辛辣に見えた。(『与謝野晶子評論著作集 第十五卷』 二〇〇一年五月 龍溪書舎 八七頁)

文化学院中学一年の「結び字II橋」による作品と添削の一事例を次に見ることができる。

原作 どこから流れきたりし花びらの橋の下をばそとすぎゆく  
添削 夏の川流れきたりし花びらの橋をばそとぬけてゆく

「どこからか」を「夏の川」として曖昧さを解消し、「そと」を「そと」、「すぎゆく」を「ぬけてゆく」してより短歌的表現にしている。B (三段階評価)。(平子恭子 三八四頁)

一九四一年、太平洋戦争が始まり、すべての学校が軍国主義化していったとき、院長の西村伊作は、ついに一九四三年九月に廃校を選んだ。共立高等女学校に転校させられた仙波久子は、こまぎれの教科書や天皇崇拜の教育に違和感を味わった経験を記したあとで、文化学院では基礎学力の教育が欠けていたことを指摘している。

高等女学院としての教課を受けてみて痛感することは、自分に基礎学力がついていなかったということだった。数学や物理、語学などはそのために思わぬ苦労をした。(仙波久子「無宿者」の記『愛と反逆』一九七一年五月 文化学院出版部 三四三頁)

戦争が、芸術中心学校の光と陰をけざやかに浮かび上がらせたのであった。

## 2 羽仁もと子の国語教育

一九二一（大正十）に創設された自由学園において、羽仁もと子は国語科の目的を簡潔に述べていた。

時文（現代文）にたいする十分なる読書力を養い、時文をもつてめいめいの思いを十分に述べ得る力を持たせること（7 二〇頁）

羽仁もと子は、作品の一部を抄出して集めた選文集としての教科書を否定した。

様々の文章を一文ずつぬき集めてある今の国語読本は、本当に熱をもつてそれを読むほどの興味を湧き起こし得ないものです。教科書といえ、無味な読物の別名のようにおのずから感じさせられるようになったのも当然のことです

ひとりで引きつけられて知らず識らず深い注意をもつて読んで行くような書物の方が、読む力を養う上にも、その書かれてある事柄から多くの知識や心持を深く学ぶ上からも、非常な利益だと思えます。

そして名作の丸ごとを収めた新しい教科書を作りたいと述べる。

この考えから、私も自由学園女学校の一年生のために、教科書を選定して、殆ど決定しようとしています。明治年代に出来た歴史的名著を主として、それに例えば独歩、藤村、蘆花などのような最近の人々の散文、詩、または紀行文などの一、二種を添えようとしているのです。

近代の新鮮な教材を、作品丸ごとを、という願望を述べている。

自由学園の授業は復習主義であった。次は、創立期に卒業した生徒の回想である。

自由学園の授業方法は「復習第一主義」であった。復習学習に親しんでいく過程がある生徒は回想している。

勉強の方法について最初に一つの約束があった。学校に持つてく

るノートは雑記帳一冊だけでよい。学校ではどの時間もよく聞いて心に入れ、要所要所だけ雑記帳に書いておく、家に帰ったら今日習ったことを思い出して復習し、雑記帳に記した覚えを参考に、学科一つ一つにノートをつくること、家での勉強はどこまでも復習が第一。当時家での勉強は予習することと考えられていた英語でも、今日習ったことの復習を徹底的に、すっかり覚えてしまいうまで繰返して復習するようにといわれた。ノートをつくることは、はじめ苦痛だったけれど、理科でも、地理でも、衛生講話でも、自分の書いたものがだんだんにたまつてゆく喜びと、毎週先生がして下さる批評に励まされて、だんだんよく出来るようになった。

授業中はひたすら聞く。大事なところとそうでないところを聞き分け力が育つ。聞く力と習慣が育てられている。過程での復習では学習内容の定着と構造的把握力が育つ。

作文はたびたび書いて批評してもらったと、同じ生徒が書いている。小学校の時から少女雑誌などを乱読していて作文にも軽々しくあわれ悲しやみたいな意味のないことをかく人があった。そのことから乱読のよくないことをよくよく話して下さった。「皆は毎日こんなに元気で忙しく勉強したり働いたりしていて楽しいことばかりの生活なのに、どこが悲しいのか、あわれなのかそんなことは何も無い筈だ。物を読んだり書いたりする時は、深い心でよく考えながらしなくてはいけない」と、読書する心がまえ、ものを書くよい態度について教えて下さった。

羽仁は、生徒の自然から生まれる感情が摩滅していくことを恐れたのである。自然に内から生まれる感情が少女雑誌などから流される常套句によって隠され、消えていくことを戒めた。「深い心でよく考えよ」と言った。生徒の一人ひとりに自分の「感じ方」があることを自覚させ、各自の認識力を育てようとしていた。

ミスタ羽仁からは「常山紀談」や謡曲、漢詩集を学んだ。

その中でも謡曲「鉢の木」はみな大好きで暗誦するほど感銘をう



けた。三学期になつて（二月十八日）、それを家族（小グループ―引用者、注）毎に劇にすることになった。発表までは衣裳も装置も演出もすべて秘密で、それぞれの家族が工夫をこらした。五つの家族が同じものをするのを次々と見るのは両先生にとつては大変な忍耐であつたと思うけれど、ある家族の時頼公を、ミスタ羽仁は「まるで印度の坊主だ」といつて笑われたり、次の家族の時頼公は、茶人のおかしなものだつたけれども、みな無邪気に精一杯に演じた。その後学校で折にふれてするようになった「劇」の最初であつた。（自由学園女子部卒業生会『自由学園の歴史I』一九八五年 婦人之友社 五七・五八頁）

新教育の学校では劇をして楽しんでいたことが分かる。劇化によつて学ぶことは多かつた。

「人間」を育てようとする与謝野晶子の教育思想、と「社会生活者」を育てようとした羽仁もと子の教育思想には、「国民」教育という狭い教育観から自由であつたところに大正デモクラシー生まれの共通項があつた。与謝野晶子は芸術によつて現実を超える高い人間性を育てようとし、羽仁もと子は家庭経営の実務能力を育てることによつて堅実な社会人を育てようとしたのである。

文化学院は全体主義への抵抗へと踏み出したのであり、自由学園は教育の自由を守つたのであつた。

### 十三 講演会と弁論大会

#### 1 講演会の開催

大正期には、明治期に設立された中等学校の充実期にあたり、各学校は、生徒の夢を鼓舞し、理想へ向かう意志を高めようと名士の講演会を開催した。

- 1-1 栃木県立足利女子高校では、次のような講演会を開いた。
- |               |          |       |
|---------------|----------|-------|
| 一九二二（大正元）年十二月 | 婦人問題について | 高島平三郎 |
| 一九二五（大正四）年五月  | 以春風接人    | 新渡戸稲造 |
| 一九一八（大正七）年十一月 |          | 海老名弾正 |
| 一九二一（大正十）年十月  | 講話       | 西田 天香 |
|               | 十一月 講話   | 山室 軍平 |
| 一九二二（大正十）年二月  | 講演       | 笹川 臨風 |
- （足利女子高等学校『八十年史』一九八九年 一〇九頁）
- 1-2 長野県松本中学校講演会
- |               |            |        |
|---------------|------------|--------|
| 一九一六（大正五）年十月  | 化学の戦争とは何ぞや | 長岡半太郎  |
| 一九一七（大正六）年五月  |            | 島崎 藤村  |
|               | 十月 独創      | 姉崎 正治  |
| 一九一八（大正七）年十月  | 現世の病弊      | 福島 安正  |
|               | 十二月        | 澤柳政太郎  |
| 一九一九（大正八）年六月  | 現代学生処方針    | 佐藤海軍中将 |
| 一九二五（大正一四）年九月 |            | 平沼騏一郎  |
- （松本中学校・深志高等学校『九十年史』一九六九年 五七四頁）
- 1-3 各講演の内容をつまびらかにすることは容易ではないが、記録されているものがないわけではない。次にその一つ、澤柳政太郎の静岡中学校における講演の要旨を再録する。一九一九（大正八）年九月の講演である。テーマは「青年諸君に告ぐ」テーマであつた。
- 「日本の活動発展と云ふ事はすべて青年諸君に待たねばならぬ」と前置きしてその自覚をうながし、さらに「過去五ヶ年間に

ける世界の「大乱を目撃」できたことは「千載一遇」の「幸運」であり、今後の世界の変化に日本人として対応していくためには「力を大いに養はねばなりません」と説いた。そしてそのためには、「青年の三大特権」の活用をはかること、すなわち

第一に全力を挙げて自分の時間の総てを挙げて修養に充つること

第二に生活の圧迫を受けないで自由に居られると云ふこと

第三に自由に理想界に逍遙し得ること

以上三つの特権を自由に行使し得た人が立派な人になり得るのであろう、(『静中静高百年史編集委員会』『静中静高百年史 上巻』一九七八年十月 七八九・七九〇頁)と静岡中学校生の努力を促した。

大正期の講師は思想家・作家・学者・軍人・宗教家・政治家など多様であった。生徒の人生観形成に資するところが大きかった。又、ことはその力を感じ取った生徒も多かった。

## 2 弁論大会

大正期半ばから弁論活動も盛んになっていった。一対多の自己表現の場であり、自己表現の技術を学ぶ場であり、異なった意見と出会う思想を鍛える場でもあった。

### 2-1 県立宮崎高等女学校の「初めての弁論会」

宮崎高等女学校では、一九二四(大正十三)年九月に初めての弁論会(第一回)が開かれた。第一回は一・二年生。第二回(十月)は三・四年生。翌年開かれた第三回(十四年一月)は全学年の会であった。

### 第三回弁論会の演題は次の通りであった。

補習科生 覚醒を求む・感じにまま

四年生 徹底・英語演説・秋

三年生 心の糧・汽車通学に教えられて・女子と体育・少女時代

と秋 自己を愛せよ・貞の人生・自由とは・希望の道・

秋を迎えた自分の心

二年生 正義の叫び、現在のわが国・戦争・細川忠興の妻・地震の現象とニーチェ

一年制生 贈物・才智・遭難哀話 同校百年史は、生徒たちが熱心に緊張して参加したと伝えている。

初めて女学生の弁論会に参加した生徒たちはともに緊張し、それぞれの熱弁に圧倒され、思わず手に汗したことであった。二回、三回と上級生になればさすがに内容、発表力も優れ、盛んな拍手がおくられた。第三回は全学年の発表で演題も多彩となり、肖時の女学生気質の一端がうかがえる。

(『百年史編集委員会』『大宮高校百年史』

宮崎県立大宮高等学校 一九九一年十月 二八六頁)

### 2-2 弁論大会の隆盛と中学生の軍国意識

大正十四年秋に開催された、京都市私立東山中学校の第一回校内雄弁大会には、各学年・各部代表二七名が登壇している。その船出の弁は、「弁論論」である。

弁論は吾々青年唯一の武器であり、国衰へんとすれば、眠れる国民を覚ますの大なる働きをなし、資本家横暴烈しければ、これを打懲すの威力ある武器となり、又民衆苦しめばこれを慰むるの誠ある慰安者となる。その用途たるや実に宏大なりと言はざるを得ないのである。茲に於いて吾々は愈々一切の束縛から解放たれて原野に包吼し駆ける勇猛なる雄獅子たらんと期し、洋々たる大海への舟出の準備として、又近來殊に意気 消沈せる、本校生徒の覚醒を求むるため本年第一回校内大雄弁大会を開催す。(『校友会誌 第十四号』一九二六年二月 東山中学校校友会)

次に各学年一名を選んで、その演題を掲げ、難波東洋男演説の要旨を引用しよう。

二、慈善 一年 藤谷君

五、偉大なる信念 二年 岡本君

- 六、力は成功の要素なり 三年 松野君
- 八、希望 四年 高木君
- 九、日本へ 五年 難波東洋男

或ひは宗教界、教育界、思想界の腐敗を歎じ、或ひは現代の青年の空想より実現への覚醒向上を叫び、或ひは国難は来た、吾人は三千年来のたぐひない御恵み深き祖国のため須らく起てと叫ぶ、或ひは身を鍛へ、心を練らなければならぬ。而してその者は常に境地を選ばなければならぬ。酒気ある所、粉黛の匂ふ所、決して鍛身錬心の好道場ではない。また虚偽に隠れ安逸に走らんとするが如きは大丈夫たるものゝ態度にあらず、と静かに説き、或ひは人類愛を絶叫し正義人道を無視せる彼の米国の態度彼の常に唱ふる紳士的なりやと、悲憤慷慨熱涙交々語り、或ひは人口は面積に準じないで年々増加する。従つて限りある食料の供給は限りなき人間の需要を充し得べくもない。金融の逼迫は企業の前途を遮り、失業者は日に加つても就職志望者の道は更に開けない。階級争闘の悪現象加ふるに、暴行、強窃盗、自殺、殺人等の社会的罪惡を指摘し、社会制度の改善を叫ぶあり。否、我国の食料は缺乏したるにあらず、国人の奮励また来らず、社会制度の缺陷も国人各自の自覚が最も大なりと論ず。

或ひは時代の先駆者たれ！万人の内から選ばれたる一人として現在の国難を荷ひ得る人として起て！ (同前書一四六頁)

その後、同校の五年生・難波東洋男は、同年十月二四日に開かれた第十四回関西中学校雄弁大会(山口仏教会館)に出席している。参加三十校の代表が登壇した。その演題のいくつかは、次の通り。

- 二、真の平和を求むるならば 本校 松本重美君
- 四、奮起せよ祖国の為に 聖峰中学 篠田忍成君
- 六、人生を意義あらしめんと欲せば 花園中学 島田伊佐次君
- 七、小さき事 京都師範 森田 栄君

コラム 1 弁論の力

大正七年十一月二三日夕刻、神田の南明俱樂部を会場として浪人会(右翼団体・吉野作造教授の立会演説会が開かれた。浪人会の代表四人は、吉野に「執筆を停止せよ」と迫った。吉野は論理的に弁舌した。  
「いかなる思想にせよ、暴力をもって圧迫することは絶対に排斥せねばならない。思想にあたるに暴力をもってすることは、それ自体においてすでに暴行者が思想的敗北者たることを裏書きするのである。……………」

陛下の赤子に対して個人が勝手に制裁を加えることが是認せられるならば、これこそかえって乱臣賊子ではないか。国体を破壊するものは、浪人会一派の諸君の行動ではないか。……………」

演説終るや湧きおこる拍手と歓呼の聲が吉野の勝利を明らかに告げた。(2芳賀綾『日本人はこう話した』一九七六(昭和五二)年五月 実業之日本社 六四・六五頁)

吉野は、右翼の用語を転倒させてその行動の矛盾を突いたのである。弁論の力の勝利であった。これを契機にして、東大新人会が結成され、民本主義から社会主義運動へとつらなる思想運動が展開された。

コラム2 配属将校の演説通報

宇都宮中学校の初代配属将校は、岸鉄三少佐であった。「温厚であったため、生徒は軍事教練に何ら抵抗を示さなかったが、『配属将校が生徒の弁論練習の内容をメモして軍に報告していた。』ということもあった(『同窓会報』第一号)。」と同校『百年誌』には誌されている(『百年誌』一九七九年五月 栃木県立宇都宮高等学校創立百周年記念事業実行委員会 一一九頁)

難波東洋男は雄弁大会各弁士の弁論内容を次のように報告している。当時の中学生の思想と語彙及び話のスタイルがうかがえる。

宗教界、教育界、思想界の腐敗を歎じ、或ひは現代の青年の空想より実現への覚醒向上を叫び、或ひは国難は来た、吾人は三千年來のたぐひない御恵み深き祖国のため須らく起てと叫ぶ、或ひは身を鍛へ、心を練らなければならぬ。而してその者は常に境地を選ばなければならぬ。酒気ある所、粉黛の匂ふ所、決して鍛身錬心の好道場ではない。また虚偽に隠れ安逸に走らんとするが如きは大丈夫たるものゝ態度にあらず、と静かに説き、或ひは人類愛を絶叫し正義人道を無視せる彼の米国の態度彼の常に唱ふる紳士的なりやと、悲憤慷慨熱涙交々語り、…中略…社会制度の缺陷も国人各自の自覚が最も大なりと論ず。（『校友会誌 第十四号』一九二六年二月 東山中学校校友会一四八頁）

語句の選択においてやや空疎な大言壮語の傾向が見られ、内容には、「人間・個人・自己」の視点が薄れ「祖国・国民・軍国」の観念が全面に現れている。世論においても中学生の意識においても「国家主義」が広く行き渡りつつあった大正末期の世相を反映している。中学生たちが、軍国主義に向かつて、主体的に「内的同調」をすすめているのである。

#### 十四 芥川龍之介の「近代日本文芸読本」

##### 1 文学読本の隆盛

明治期の小学校の卒業生の多くは、素朴に手紙が書ける程度の「文字の読み書き」能力を求めていたが、大正期にはいると人びとは文章の読み書きを通して、人生や社会の意味を考える修養の書を求めるようになっていた。人々のリテラシー観が「質的なリテラシー」へと変化していったのである。

大正十三年に静岡県立掛川中学校に入学した井上敏夫は、当時の中学校の国語教室について回想している。

文学作品も、徳富蘇峰その他のいかめしい文語文も全くひとしなみの扱いであった。名簿順に音読させ、段落に区切って、段落の大意をのべ、その段落内での難語句の質疑応答を行い、あともう一度音読して、最後に半紙四つ切れ紙に、書取一〇問を聴写して提出する、というのが、常に変わらない教科書学習の方式であった。（井上敏夫「教科書 大正期概説」『国語教育史資料 第二巻』一九八一年四月 東京法令）と回想している。つまり、国語教科書は文字の読み書きと新出語句を覚えるための材料に過ぎなかったのである。井上は、「生徒の文学に対する渴望は、何ら医されるところがないというのが一般であった。

このような生徒の文学への渴望を癒やすために、大正期の半ばから、教科書とは別に『文学読本』が編纂され、多数の読者を得ていった。

垣内松三編『国文学大系 現代文学』（大正十 尚文堂）、

平林治徳他編『新国文学選』（大正十 明治書院）

金子彦二郎編『趣味の課外読本』（大正十二、明治図書）、

菊池寛編『小学童話読本』（大正十四年、興文社）、

宮島信三郎・有富郁夫・萬福直清編『明治大正名作新選文学鑑賞

読本』1925（大正十四）年10月20日 東京出版社）

芥川龍之介編『近代日本文芸読本』（1925（大正十四）年1月、興文社）

齊藤清衛編『中学国語科用 国語副読本』1930（昭和五）年十月 星野書店

当時刊行された「国語・文学」副読本は、武藤清吾氏の調査によれば、大正十二年 二点、大正十三年 十八点、大正十四年 二六点、大正十五年十 二点、昭和二年 五点であった。（注1）

ここでは、宮島他編と芥川編の『副読本』を取り上げて、文学観、文学教育観、文学教材観を考察する。

## 2 宮島信三郎・有富郁夫・萬福直清編『明治大正名作新選文学鑑賞読本』

宮島らは、「凡例」において、読者対象を、実業補習学校・小学校・中学校・高等女学校・師範学校・農業学校・工業学校・青年処女会とし、編纂の目的を「学生の高尚純雅なる文学趣味を養成し、且つ現代の言語文章に対する鋭敏なる感受性を陶冶する為」と述べている。

作品選択の基準は、次の4項目であった。

- ① 明治・大正の中心作家の作品
- ② 芸術味の饒かな、教育的価値の大なる、人生の暗示に富み、且つ学生の道徳的感情を内から刺激するに足るもの、
- ③ 学生の体験に接近したもの、
- ④ 田園趣味に富んだもの。

編者は、「序」で文学鑑賞論を述べ、「脚注」において表現鑑賞の「手引き」をおこない、作品の後に「批評」欄を設けて作意と内容思想を批評している。

序文では、近年の「講読」の授業が注入から次第に体験へと移りつゝある。」として「字義の穿鑿」よりもむしろ多くの名作を読んで「作者の思想感情に接する」体験の方が大切である、と指摘する。つまり、「教授細目型」の講読を超えているのである。

近來人々が、従来の国語教育に不満を抱く様になつて來たことは、甚

だ喜ばしい現象である。人々は今や、教科書を唯一の宝典と考へることが出来なくなつて副読本に類する出版物を歓迎する。現行の教科書によつて、己の欲求を充たすことの出来ない人々が、副読本によつて補おうとしている。読書がに主体的になつて來たのである。

宮島は、「副読本の出現は、当局の指揮をのみ俟つといふ旧式な態度から一歩進んだ現象で所謂教育運動の民衆化である。」と評価し、民衆の自己教育運動に資するために『明治大正名作新選文学全集』を編集したのである。宮島らは、次のような作品を選んでいる。

- 卷一 弁当（短編小説） 加藤武雄  
二 出発（短編小説） 加藤武雄  
三 春の朝（詩） ブラウニング・上田敏訳  
……

- 一一 トロッコ（短編小説） 芥川龍之介  
一二 蜜柑（短編小説） 芥川龍之介  
……

- 卷五 九 暴風雨（小品文） 里見 弴  
一〇 八重桜（短歌） 空穂 他  
一一 欧羅巴に（詩） 川路柳虹  
一二 労働者の子（短編小説） 豊島與志雄  
一三 日なた（小品文） 葛西善藏

宮島らは、『新選文学読本』において当代の作品を選んでいる。古典文学が「文芸」として尊重されていた時代に近代文学を

「文学」として「教育的に価値ある」作品として選んだのである。そして、各作品には「客注」をつけている。例えば、卷五十二の『蜜柑』（芥川龍之介）の冒頭のパラグラフへは次のように。

○ 淋しさと、小犬とが、次に來る可き事件を何となく暗示してゐる。

○ 疲労、倦怠といふ心持が、「私は外套云々」以下の所にあらはれてゐる。」 p135

読みを深める「鑑賞の手引き」である。

作品の「批評」には、各作品におよそ一六〇〇字程度を当てている。「蜜柑」に関しては、宮島らは、「蜜柑に於て氏は何を表現しようとしたであらうか。」と作者の表現意図を問題にしている。

氏は此の一篇を書き乍ら、常に小娘が蜜柑を投げる所を念頭に置いたにちがひない。此の一篇のねらひはそこにある。而して、娘が投げる蜜柑は何を暗示してゐるであらうか。と問いかける。

私は貧しい兄弟の此の別れ、貧弱なこの贈り物の中に真の酔を感じるのである。殊に車窓から投げた蜜柑が、暖かな日の光に染まつたといふ書き方の中には、作者が小娘の性格に或る敬虔さを持つてゐることを窺ふに足るものがある。作者の取材は確かに面白い。

と「小娘―蜜柑―日の光」の取り合わせから作者の表現意図「小娘の性格の敬虔さ」を見出だしている。そして、作品の結構（すじの組み立て）の上乗なることにも触れている。

このような読本の作り方から、宮島たちが文学への確かな鑑賞眼を持ち、作品に即して脚注と批評を書いて、鑑賞の方法（体験の仕を学ばせようとしていたと推しはかることが出来るよう。

なお付言すれば、私が古書店から購入した宮島『鑑賞読本』の表紙裏には、四東組河原栄子他五名、四西組織田秀子他一〇名の生徒の名前が書き込まれている。この『読本』一冊は、古書店に出回る以前に、教室で回覧されていたようである。紹介する教師とそれを順番に回し読みする女生徒がいたことを記録している。

### 3 芥川龍之介編『近代日本文芸読本』（1925〈大正十四〉年1月刊）

芥川龍之介編『近代日本文芸読本』は、中学校教科書編纂の意図があったため、学年別各一冊、計五冊が刊行された。各巻の始めに芥川が「縁起」・「序」・「凡例」を書いている。

「縁起」によると、芥川は、大正十二年九月一日に興文社の石川寅吉氏の依頼を受けて軽い気持ちで引き受けた。ところがいざ取り掛かってみると意外に骨の折れる仕事であることが分かり、何度も「抛たう」としたが、石川氏の粘り勝ちで、教科書には出来なかつたが「読本」はおよそ一年有半をかけて出来上がった。「検定を受ける為には有島武郎、武者小路実篤両氏の作品を除かなければなら」なかつたので、教科書にはしなかつた。芥川『読本』には両氏の作品を含めて全百四十八編の作品が収められている。

「縁起」には、両氏の作品を載せることへのこだわりを「『近代日本文芸読本』は『近代日本文芸読本』にしたかつたから」と意味不明のトートロジーで語っている。この「近代日本文芸」という書名へのこだわり、本書に選定した作品群によつて芥川なり「近代文学」への定義を試みたと考えられよう。芥川による文壇作家の作品の選定は、近代文学成立後三十年間に生まれた作品群からのカノン（正典）化の意味を持つていた（注1）。芥川は単行本に収録される以前の同時代の雑誌掲載のものも選んであり、並々ならぬ意欲が感じられ、また苦勞も多かったであろうことが想像できる。

「序」は、明治大正の諸作家の作品中、道徳、法律、社会的慣例等に抵触せず、しかも文芸的或は文芸史的に一読の価値ある作品を収めた、と述べている。

ついで、「序」は、文芸教育を非難する世間の声に対して激しく批判している。

文芸的教育の特長は今更多言を費さずとも好い。唯編者の一言しただいのほ文芸的教育の「特短」である、文芸的教育は特長と共に時には「特短」をも説かれぬことはない。しかしその「特短」とは何かと言へば、薄志弱行に陥るとか、儉安姑息に傾くとか、いづれも文芸的教育とは直接に縁のないことばかりである。薄志弱行の輩や儉安姑息の徒も尚且文芸を愛するであらう。がそれは偶彼等の園芸をも愛するのと同じことである。よし又文芸を愛した為に悪徳を学んだものがあるとしても、一を以て他を律するとす

れば、我等は日射病を予防する為にもやはり日輪を打ち砕かなければならぬ。編者がこの読本を編したのは勿論文芸的教育の「特短」を認めてゐない為である。けれども万一この読本にさへ毒せられるものがあった時には、編者は決して教育家諸君や年長老諸君や青年諸君の「特短」を認めるのを辞せないであらう。

\*芥川の言う「特短」は「短所又は欠点」の意である。

『近代日本文芸読本』は、文学的価値と教育的価値の交点に浮かび上がる作品が選ばれたのである。

その内容を知るために、ここでは「第一集」と「第五集」の目次を録する。

第一集

- |            |        |
|------------|--------|
| 最もよき夕      | 佐藤 春夫  |
| 千住の市場      | 吉田絃二郎  |
| 椰子の実       | 島崎 藤村  |
| 朝の散歩       | 谷崎 精一  |
| 仏陀と孫悟空     | 武者小路実篤 |
| 「己が名を」其他   | 石川 啄木  |
| 飼犬         | 野上弥生子  |
| 夕の星        | 土井 晩翠  |
| 笛を合はす人     | 室生 犀星  |
| 「冴え返る」其他   | 小沢 碧童  |
| 雀の巢        | 真山 青果  |
| 菓草の花       | 加藤 武雄  |
| 植ゑ忘れた百合の赤芽 | 岩野 泡鳴  |
| 非凡なる凡人     | 国木田独步  |
| 雪女         | 秋田 雨雀  |
| 「愛しげに」其他   | 窪田 空穂  |
| 競漕         | 久米 正雄  |
| 父の記憶       | 宇野 浩二  |

- |                 |        |
|-----------------|--------|
| 新体詩見本           | 斎藤 緑雨  |
| 人鹿の父            | 岡本 綺堂  |
| 郊外小景            | 近松 秋江  |
| 「遣羽子や」其他        | 高浜 虚子  |
| トロッコ            | 芥川龍之介  |
| 嗚呼広丙号           | 山田 美妙  |
| 曙               | 千家 元麿  |
| 練馬の一夜           | 大町 桂月  |
| 植物園小品           | 北原 白秋  |
| 「青麦の」其他         | 尾上 柴舟  |
| 平凡              | 二葉亭四迷  |
| 大判半裁詩(ストリンドベルク) | 小山内 薫  |
| 遠き薔薇序詞          | 堀口 大宇  |
| 向島              | 坂本四方太  |
| 老曹長(理リリエンクローン)  | 森 鷗外   |
| 第五集             |        |
| 城崎にて            | 志賀 直哉  |
| 「木蓮は」其他         | 松根東洋城  |
| 陰影              | 久保田万太郎 |
| 逝く子             | 島木 赤彦  |
| 能楽に就いて          | 小宮 豊隆  |
| ひとしづく           | 蒲原 有明  |
| 入江のほとり          | 正宗 白鳥  |
| 「狂人の」其他         | 斎藤 茂吉  |
| 思想と実行           | 阿部 次郎  |
| 昼——祭の日——        | 水上瀧太郎  |
| 「大風の」其他         | 内藤 鳴雪  |
| 誕生              | 谷崎潤一郎  |

帆船  
みづの上

「天地の」其他  
土

ああ大和にしあらましかば  
不幸な偶然

「ためらはず」其他  
仮面

彼が三十の時  
「萍涼しく」其他

二日物語——彼一日——  
金剛杵

「女の童」其他  
絵踏

歌よみに与ふる書  
なみだ

感傷的の事  
スキフトと厭世文学

三木 羅風  
樋口 一葉

伊藤左千夫  
長塚 節

薄田 泣菫  
里見 淳

与謝野 寛  
森 鷗外

武者小路実篤  
中塚一碧楼

幸田 露伴  
斎藤 緑雨

佐佐木信綱  
木下李太郎

正岡 子規  
佐藤 春夫

徳田 秋声  
夏目 漱石

第一集には、「新体詩見本」(齊藤緑雨)のパロディ三篇を掲載。

上田(敏)調

今釜出でしほやほやの

いともおいしきあぶり芋  
手に取り見れば湯気の露

丸焼月に似たるかな。  
晝餐にかへて買はまほし

一口やれば忘れぬ  
汝が又の名の十三里

この味めでぬ人である。

ここには、芥川の多様な文体を示そうとする教育的配慮を見る  
とともに、文学的ユーモアを見ることもできよう。

武藤清吾は、芥川『近代日本文芸読本』収録作品の特徴を十項目に分  
けて指摘している。

① 家族、親子、兄弟、に関する作品の収録

② 学校を含む社会問題言及作品の積極的採用

③ 人道主義的な問題群の提示

④ 怪異や幻想を描いた作品群

⑤ 生と死に関わる作品群

⑥ 近代日本の風物の紹介

⑦ 近代短歌・俳句・詩史を俯瞰する作品配列

⑧ 古典に話題を拾った作品の配置

⑨ 文芸や文体に関する作品の紹介

⑩ 読本採用の多い著名「国文学」者の作品を除外(注 武藤清吾著『芥  
川龍之介編『近代日本文芸読本』と「国語」教科書教養実践の軌跡』二〇一  
一年二月 溪水社 五一頁)

これを見ると、日本社会の近代化過程に生きた芥川が、「文学と教育  
の近代化課題」として何をどのように意識していたかを推測できよう。

芥川龍之介の文芸鑑賞論  
一九二四年文藝春秋社主催の『文芸講座』において芥川龍之介は  
講演「文芸鑑賞」をおこない、後に文章化した。その概要は、文芸鑑賞  
するには訓練が必要である。すなわち、(一)どう言う風に鑑賞すればよ  
いか? (二)どう言う風に鑑賞すればよいのか? (三)何を書いたか?の  
三点である。

(一) どう言う風に鑑賞すればよいのか?それは、「素直に作品面  
面すること」、「これはこう言う作品とか、あれはああいう作品と  
か言う心構えをしないこと。



(二) どう言う風に鑑賞すればよいか？今度は出来るだけ丹念に

目を配って読む。筋の発展のしかた人物の描写のしかたとかは  
勿論、一行の文字の使い方にも注意していく。

(三) 何を書いたか？ を捉えるためには、「何よりも心得なければ  
ならぬことはその作品の中の事件なりあるいはまた人物なり  
を讀者自身の身の上に移して見ることに、——すなわち体験に  
徴して見ることであります。」と、述べている。

芥川が「文芸と言うものを出来るだけ平易に考えてみたい」と前置き  
して語った鑑賞論である。まず予断や予備知識を持たずに直接に作品  
に向かい合うことを説いている。そして讀者自身の「体験に徴して」、  
つまり讀者の体験を通して読む「主体的な讀者」になることを期待して  
いるのである。石川啄木の言う「金型読書論」を超える文学読書を説い  
ていた。

#### 5 教材観の拡大と文学教育の課題

大正期半ばから刊行された多くの「読本」は、文学教材の質を高め教  
材観を拡大した。

とくに芥川『読本』に初めて採用された作品で以後の教科書に採録さ  
れ継承されていったものは多い(注3)。芥川は、『読本』の「凡例」  
において、「勿論容易に読み得るのは容易に味はひ得るのとおなじこと  
ではない。」と注意書きしている。この「味はひ得る」読書力を育てる  
ことが、その後の文学教育の課題となった。

#### 参考文献

- 1 井上敏夫「教科書 大正期概説」『国語教育史 資料 第二巻』  
一九八一年四月 東京法令
- 2 小柴昌子『高等女学校史序説』一九八八年五月 銀河書房
- 3 野地潤家『中等国語教育の展開——明治期・大正期・昭和期——』  
一九九八年一〇月 溪水社
- 4 眞有澄香『「読本」の研究 近代日本の女子教育』  
二〇〇五年 おうふう
- 5 橋本暢夫『中等学校国語科教材史研究』二〇〇二年七月
- 6 武藤清吾猪『芥川龍之介編『近代日本文芸読本』と「国語」教科  
書教養実践の軌跡』二〇一一年二月 溪水社
- 7 田近洵一『現代国語教育史研究』  
二〇一三年七月 富山房インターナショナル

◎ 本稿第十一節で引用した『衣服展覧会記事 岸の姫松特別号』  
(大阪府泉南高等女学校校友会)は、渡邊春美氏の提供に拠る。記  
して感謝申し上げる。(浜本純逸)

有産階級の政治活動家と下層庶民の異議申し立て者たちの新しい政治言語が、二十世紀初頭に登場した。この言語は、国会や公園などの新たに築かれた場で語られた。この言語は、選挙をはじめ、集会、暴動、ストライキなどの新行動様式をとって表現された。そのひとつのキーワードは、平沢(計七)の劇にも登場した「国民」という言葉である。「国民」の文字どおりの意味は「国を構成する人々」であり、通常英語で the people とか the nation と訳される。二十世紀初頭の時点までに、この言葉は「帝国」とおなじくらいひんぱんに使われるようになった。「国民」と「帝国」はいずれも、日本の民衆運動が政府にたいし、政治プロセスを開放するよううに、そして人々の利益を念頭において統治をするよううに、と迫るさいにもちいるキーワードとなった。

皮肉なことに、そもそも、どのような経緯でこれらふたつの概念が人々のあいだに定着するにいたったかといえは、それは、一八八〇年代以来政府自身が手がけてきた国づくりに向けたさまざまな政策の結果にほかならなかった。

(アンドルー・ゴードン著 森谷文昭訳 みすず書房

『日本の200年 上』二〇〇六年〇月 二八五頁)

\* 「国民」と「国語」は似ている。どこが？

\* あなたは、次の何ですか。

国民・人民・市民・臣民・住民・庶民・大衆・民衆